会報
特攻
平成27年5月

第105号

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
〒102-0073　東京都千代田区九段北3-1-1靖國神社遊就館内・地階
電　話　03（5213）4594
ＦＡＸ　03（5213）4596
http://www.tokkotai.or.jp

振替口座　00140-6-59580
編集人　飯田正能
発行人　羽渕徹也
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

「特攻勇士之像」への献花式（杉山理事長）

第36回特攻隊合同慰霊祭

平成27年3月28日（土）11時～12時
於　靖國神社拝殿・本殿

式次第

国歌斉唱　トランペット　堀田　和夫
修祓・献饌
祝詞奏上　理事長　杉山　蕃
祭文奏上　一誠流　吉野　一心
献吟　逢坂　龍信　献吟
笛
奉納演奏
世田谷コール・エーデ合唱団
特攻隊慰霊顕彰会男性合唱団
指揮　大穂　孝子
トランペット　堀田　和夫
「さくら」「同期の桜」「故郷」
全員斉唱　「海ゆかば」
トランペット　堀田　和夫
昇殿参拝　参列者一同
（「国のしずめ」　トランペット　堀田　和夫）

◇　◇　吟　吉野　一心
◇　◇　笛　逢坂　龍信

飛行第五戦隊長　高田　勝重
昭和19年5月27日ビアク島付近で戦死
六度散り七度咲きて醜鷲（しこわし）を
われ撃ちやまむ大君（おおきみ）のため
真珠湾攻撃特殊潜航艇長　岩佐　直治
昭和16年12月8日ハワイ軍港で戦死
桜花散るべき時に散りてこそ
大和の花と賞（め）らるるらん
◇　◇　◇

目次

第36回特攻隊合同慰霊祭 ……1
天皇、皇后両陛下のパラオ・ペリリュー行幸啓について …6
ネルソン・タッチとカミカゼ
―呉水交会編・大之木英雄寄稿・講演集を読んで― ……11
終戦70年を巡る報道に思う
―頼りない「悲惨」一辺倒如何に復興したかを伝えよ―……17
再び「ノーブレス・オブリージュ（no-blesse o-blige）とは、学徒出陣に思う」 ……18
栃木県護国神社研修報告 ……27
世田谷山観音寺
特攻平和観音月例法要 ……28
「英霊を偲ぶ心の旅」に参加して③ ……31
《読者の声①》
真正な日本人の懐中メモ（続）…32
《読者の声②》
「土と兵隊」南京攻略と父 ……34
《現代若者の特攻観》（大学教育の場から）神風特攻隊と回天を学んで ……38
平成26年度事業報告 ……39
平成26年度正味財産増減計算書…41
内閣府認定等委員会立入検査 …42
平成27年度第1回理事会及び定時評議員会実施報告等 ……42
事務局からの報告等 ……43

祭文

本日ここ靖國神社の御社頭に、御来賓の皆様の御臨席と御遺族、戦友、そして関係者の皆様が相集い、第36回特別攻撃隊合同慰霊祭を挙行するに当たり、謹んで在天の御英霊に申し上げます。

今年は皆様が若き命を捧げられて終わった大東亜戦争終結より70年、畏れ多くも天皇、皇后両陛下が間もなくパラオに行幸啓遊ばされることとなったのを始め、数々の追悼行事が行われんといたしております。私ども特別攻撃隊戦没者の慰霊顕彰に携わる者にとりまして、正に心強い、重要な節目の年であります。世代交代という厳しい現実を乗り越えて、皆様を真に追悼申し上げる心を次世代に確実に伝承していく努力を更に一層強めなければならないと決意いたしております。

昨年の慰霊祭より1年、我が国の行く先に、ほんのりと見え始めた明るい兆しは、着実に大きくなりつつあると考えております。消費税増税による国家財政回復への着実な手応え、円安定着による経済への影響、大規模なベースアップ等、その成果は将来に向けて明るい気持ちを持つに相応しい状況になってまいりました。また、東京オリンピック・パラリンピックの準備等、期待の膨らむ話題も明るい材料であります。とは言え、領土問題、歴史認識を巡る周辺国との見解の相違から生ずる国際関係の軋み、遅々としている東日本大震災、福島原発環境汚染問題からの復興、小子高齢化した社会保障問題、環太平洋経済連携交渉問題等、英霊の皆様に胸を張って御報告申し上げる状態でないことも事実であります。中でも憂慮すべきは、東日本大震災の復興状況であります。地震・津波の災害に加えて、原子力発電所事故による放射線被害の試練を受けてから4年の年月が流れました。官民挙げての復興活動ですが、巨額の予算が未使用の状況であったり、復興は遅々としております。70年前に我々が被った国家壊滅の体験、そして零からの出発に、雄々しく立ち上がった皆様の朋友の方々の凄まじい努力とエネルギーに想いを致す時、忸怩たる思いを禁じ得ません。

また、我が国固有の領土への理不尽な主張、歴史認識を巡る偏った価値観の異常な主張等、近隣諸国の態度・対応には、平和国家として、70年の実績を持つ我が国の行き方を踏みにじるものであります。これに対する我が国の対応は、独立国家として最も重要な民族の誇り、矜持といった観点から、毅然たる対応と長期的視野に立った国際関係の建設的発展の理念を堅持することが重要であります。現今の状況は、異常な軍事力増強を背景に、半ば恫喝的態度が見られる状況にあり、若くして国のため一身を捧げられた英霊の皆様に、申し開きできるものなのか、大いに疑問を感じるところであります。幸い、ここ1年半、国家安全保障戦略が決定され、基本理念として国際協調に基づく積極的平和主義が明示されたのに引き続き、懸案の集団的自衛権に関しましても、理念の論争から、実際的な事態における必要性を容認する一歩進んだ段階の法整備が進んでおり、危機管理体制に一段の前進が見られたことは評価すべきこととして御報告申し上げるところであります。

英霊の皆様が、国のため全てを投げ出された戦いが終わり、既に70年の歳月が流れんとしております。思えばこの間、戦争によって疲労し破壊された、文字どおり焦土・極貧の状態から、ここに一部参集しておられます、英霊の皆様の戦友・同期・同輩の方々がその中核となり、見事に奇跡的復興を成し遂げ、世界に誇れる隆盛を我が国にもたらされました。この活動力の根源には、若くして国に一身を捧げられた皆様への同期・同輩としての責任感が大きく寄与したことと忖度致すところであります。東日本大震災の復興が遅々たる情勢下、この世代が復興に成功した原因は何であったのか、是非、真剣に考え直す必要があると言えましょう。

世代交代が進み、英霊の皆様が生を共にした方々は、その数を減らしつつありますが、後に続く世代の私どもは、英霊の皆様が辿られた厳しい現実を忘れることなく、己の生き方を自励・振作する起点としなければならないこと、そして、社稷・国の現実が、果たして英霊の皆様に御満足頂けるものなのかという判断基準を大切にすることの二点を中核に、これからも国民的な事業として、この慰霊顕彰を継続発展させて参らねばならないと肝に銘ずる次第であります。

天皇、皇后両陛下のパラオ行幸啓を機に、重ねて、国に殉じた皆様の尊い御心情に思いを馳せ、ここに参集した一同、英霊の皆様方に一層の敬意を表明し、祭文といたします。

平成27年3月28日

公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長　杉山　蕃

今年は、大東亜戦争終戦70年の節目の年に当たり、殊の外感慨無量なるものがある。その特別な想いを籠めて、3月28日（土）11時より、靖國神社における、当顕彰会恒例の第36回特攻隊合同慰霊祭が厳粛、盛大に斎行された。御遺族28名を始め御来賓、戦友、一般会員等合わせて250余名が参集して、英霊奉慰の誠を捧げた。今年は桜の見頃と好天に恵まれてか、当日受付けの一般会員等が約50名に達する予想外の盛況振りであった。

この日、靖國の宮居の桜は、例年より3日早い3月23日の開花宣言（東京の桜の開花宣言は毎年、靖國神社の能楽堂脇にある標準木・ソメイヨシノザクラの老木に数輪の花が開いたのを、気象庁の職員が確認して行われる）から5日目、ほぼ満開に近い見頃となった。しかも晴天に恵まれ、正に桜日和となった。靖國の桜は英霊の依り代（よりしろ）である。その桜を慕って、境内は多くの参詣者で溢れ、英霊の遺徳顕彰に相応しい雰囲気を醸し出していた。

また折しも、靖國神社・遊就館1階企画展示室では、平成24年から始められた「大東亜戦争七十年展」シリーズの第4回目・最終回として、平成27年遊就館特別展「大東亜戦争七十年展最終章―今を生きるすべての人々へ―」が開催（平成27年3月21日～12月8日）されている。主として昭和19年の本土防衛作戦から終戦に至るまでの関係史資料が展示されているが、今回の展示対象となる主な項目は、昭和19年秋から激化して行く本土空襲における「防空戦」、10月から始まった「特攻作戦」、昭和20年2～3月の「硫黄島戦」、4～6月の「沖縄戦」、8月15日の終戦、その後も続いたソ連軍との「南樺太」及び「占守島」での戦い等であり、その趣意書には、「先の「大東亜戦争」は、我が国の自存自衛と人種平等による国際秩序の構築を目指すことを目的とした戦いでありました。ひたすら祖国を護るという一念を以って戦場へと赴いた先人達の至誠は、ひとえに愛する家族や後に生きる私たち子孫のために奮起した尊い御事蹟であります。最終章となったこの特別展を是非御覧戴き、今日の平和の礎を築いてくださった英霊への感謝と共に、その「みこころ」を感得して戴ければと存じます」とある。

大東亜戦争の原因、目的、戦争の経過、その実相、敗戦の原因等々を知る上で、この企画展は非常に貴重なものである。先の大戦では、戦略、戦術双方の指導者の無策、判断の誤りなどもあって、あたら多くの純真な若者達の命を奪った面もあったが、至誠殉国の信念に燃える若者達は、如何なる悪条件下でも死力を尽くして戦い、散華して逝ったのである。その志の一端を知り、託された未来への遺志を継いで祖国再建に尽くさなければならない、との思いを改めて強く抱くものである。

合同慰霊祭は、トランペットの伴奏による国歌斉唱に始まり、修祓・献饌・祝詞奏上の神儀に続き、杉山蕃理事長が祭文（別掲）を奏上、「戦後70年の歳月が流れる中で、過酷な戦争を戦い抜き、国家壊滅の危機を体験し、戦後

能楽堂脇の標準木（ソメイヨシノザクラ）

祭文奏上　杉山蕃理事長

献吟　吉野一心・逢坂龍信両氏

献歌　世田谷コールエーデ合唱団・特攻隊慰霊顕彰会男性合唱団　指揮　大穂孝子氏

献歌　「海ゆかば」斉唱

は零から出発して我が国の復興と発展を担った先輩方の高齢化、更にまた、東日本大震災と原発事故による大被害からの復興・再生、加えて周辺諸国からの我が国固有の領土への理不尽な主張、歴史認識を巡る偏った価値観の主張等への対処等大変な難局を迎えつつある。慰霊事業においても、その中核となってこられた戦友世代の喪失という厳しい現実がある。しかし、国家存亡の危機に際し、生命を擲って国に尽くされた英霊の御志と残された戦友の方々の復興への偉大な努力、営々と続けられた慰霊事業への誠の心を、我々は尊敬の念を持って継承し、後世に伝えていかなければならない。この4月、天皇、皇后両陛下のパラオ行幸啓を機に、重ねて、国に殉じた英霊の尊い御心情に思いを馳せ、一層の敬意を表明し、努力して行く」と誓った。

挨拶・宇都隆史参議院議員

報告・衣笠陽雄専務理事

献吟の声は、朗々として神前に木霊し、惻々として胸に迫る。大穂孝子女史の指揮による世田谷コール・エーデ女性合唱団の献歌「さくら」、「故郷」、特攻隊慰霊顕彰会男性合唱団の献歌「同期の桜」、また、強く胸を打つ。最後は、寥々と響くトランペットの伴奏に合わせて、一同「海ゆかば」を唱和する。

表彰状　贈呈

次いで、参列者全員本殿に昇殿し、玉串を奉奠して参拝し、トランペットの演奏「国のしずめ」に合わせて黙祷を捧げ、滞りなく慰霊祭を終えた。

その後、遊就館前に、平成11年3月23日、当顕彰会の前身、財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会が建立奉納した「特攻勇士之像」（原型製作・文化勲章受賞者北村西望氏、拡大監修・日本芸術院会員北村治禧氏、拡大制作・石黒光二氏、台座銘文揮号者・文化勲章受賞者大山忠作画伯）前において、御遺族（代表臼田智子理事）、御来賓（代表宇都隆史参議院議員外務政務官）、当顕彰会（代表杉山蕃理事長）の各代表による献花式が行われ、参列者一同、代表に合わせて、拝礼を行った。

◇　◇　◇

第36回特攻隊合同慰霊祭懇親会

平成27年3月28日（土）
12時30分～14時
於「靖國会館」2階「田安の間」・「玉垣の間」

開会の辞（司会）　事務局長　羽渕　徹也
理事長挨拶　理事長　杉山　蕃
会務報告　専務理事　衣笠　陽雄
来賓紹介　事務局長　羽渕　徹也
献杯　来賓代表　堀江　正夫
懇談会食
全員斉唱「海ゆかば」
トランペット　堀田　和夫
乾杯　来賓代表　野口　清秀
閉会の辞　専務理事　衣笠　陽雄

◇　◇　◇

慰霊祭及び献花式終了後、「靖國会館」に移動し、同会館2階の「田安の間」・「玉垣の間」において、懇親会が開催された。

懇親会に先立ち、まず杉山理事長が挨拶に立ち、「今年は終戦70年の節目の年であるが、私も今年満77歳を迎えた。終戦時7歳の私は、戦争末期に、神戸付近から30機程の戦闘機の編隊が南方を目指して飛んで行くのを望見した。後で知ったことだが、それは恐らく沖縄戦での特攻隊であったろう。私が航空自衛官を目指したのも、その時の印象が強く影響している。国難に際し、身を擲って特攻に殉じた若者達、その仲間や同世代の方々が壊滅した我が国の戦後の復興を、零から出発して見事に成し遂げた。その志と気概を継承して我々は一層努力し、英霊に応えなければならない」と強調した。

次に、平成23年の公益財団法人移行に伴い、定款上総会の規定はなくなったが、この機会に、当慰霊顕彰会の運

営状況を会員に広く周知し、御支援、御協力をお願いするため、衣笠専務理事から当会の活動現況に関し、平成26年度の事業報告と平成27年度の事業計画、会員の動向等について説明があり、今後ともなお一層、会員の増強、事業の活性化に努力し、引き続き「特攻勇士之像」の全国護国神社への奉納事業を更に推進させたい、と述べた。

続いて、懇親会に移り、羽渕事務局長から来賓等の紹介がなされた後、来賓を代表して、参議院議員・外務大臣政務官宇都隆史氏が挨拶をされた。宇都参議院議員は、昨年秋、海上自衛隊の練習艦隊によるガダルカナル島からの戦没者遺骨帰還が初めて実現したこと、今年4月、天皇、皇后両陛下のパラオ島行幸啓が実現し、旧南洋群島委任統治地域の島嶼諸国との親善、ペリリュー島戦没者慰霊行事が行われることとなったこと、我が国の安全保障を巡る諸法制化が着々と進められていることを挙げ、今後とも国防と外交の任をしっかりと果たすべく、全力を傾注する」と力強く挨拶をされた。

献杯・堀江正夫英霊にこたえる会名誉会長

次いで、御来賓の元高知県知事橋本大二郎氏から、英霊の慰霊顕彰について一層の努力を注ぎたい旨の御挨拶があり、また、昨年度会員増強に特に貢献のあった全日本空挺同志会東京支部長片山幸太郎氏に対する表彰状の贈呈が行われた。

挨拶・橋本大二郎元高知県知事

その後、英霊にこたえる会名誉会長で最高齢（陸士50期、白寿）の堀江正夫氏が、英霊に対し敬意と感謝を表するとともに、慰霊顕彰事業の継続発展と会員の健勝を祈って献杯の音頭を取られた。

その後和やかな直会の宴は始められたが、途中、慰霊祭でも献歌をした「海ゆかば」を全員で斉唱して大いに盛り上がった。

最後は、来賓を代表して、陸士57期生会代表の野口清秀氏の音頭により、乾杯をして会を締め括った。

トランペット奏者　堀田和夫氏

乾杯・野口清秀陸士57期生会代表

なお、慰霊祭終了後早速、実行委員全員が当顕彰会事務室に集合して反省会を開き、改善すべき点その他今後の運営について種々活発な意見交換を行い、今後のより良き慰霊祭の執行と、会の運営について努力することを申し合わせたことも、特筆に値することであった。

（飯田正能記）

反省会・実行委員会メンバー

天皇、皇后両陛下のパラオ・ペリリュー行幸啓について

陸士61期　飯田　正能

天皇、皇后両陛下には、この4月8日～9日、パラオ共和国に行幸啓になり、8日、コロール島におけるレメンゲサウ・パラオ共和国大統領主催の晩餐会に臨まれ、同じ旧委任統治領・南洋群島内のモリ・ミクロネシア連邦大統領御夫妻、ロヤック・マーシャル諸島共和国大統領御夫妻らとの友好親善に努められるとともに、9日は、ペリリュー島において、島の最南端に建つ国立「西太平洋戦没者の碑」に日本から持参された白菊の花束を供えられ、黙祷を捧げられた。更に南西の方角に見えるアンガウル島に向かって黙礼された。

慰霊碑の前では、二つの島で僅かに生き残った元兵士や遺族らが見守り、慰霊後に両陛下がねぎらいのお言葉をかけられた。その中の一人、土田喜代一氏（95歳）は、前号の会報『特攻』第104号「ペ島のサクラ」で紹介した、終戦を知らずに昭和22年4月まで洞窟やジャングルに潜んで戦い続けた34名の兵士の一人で、元海軍上等水兵であり、終戦について疑問を抱き、様子を探るため、単身洞窟を抜け出して米軍に出頭し、調査のため来島していた元第四艦隊参謀長澄川少将に会って色々聞かされたが、なお納得せず、米軍の戦闘機でアンガウル島に連れて行かれ、戦後日本から燐鉱石採集に来ていた日本人労務者に会い、ようやく終戦を納得し、その後は同少将らに協力し、同少将の決死の説得により、残りの33名を救出したという逸話の主である（後掲の写真参照）。

続いて両陛下は、同島西海岸オレンジビーチに建つ米陸軍第81歩兵師団の慰霊碑にも花輪を供えて黙礼された。

ペ島での慰霊には、パラオ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国の各大統領御夫妻も同行された。

両陛下のパラオ親善・慰霊の行幸啓は、十数年来の強い御希望であったが、交通事情や宿泊、移動方法などで困難とされ、実現しなかったが、今回は、民間航空機や海上保安庁の巡視船「あきつしま」とヘリコプターを使用することで実現した。

平成19年3月24日～6月17日、靖國神社遊就館1階企画展示室において、「戦跡パラオ展―パラオに散った英霊たち―」（パラオの歴史と英霊展）という特別展が開催され、多くの参観者達に深い感銘を与えたが、その時、パラオ共和国のトミー・E・レメンゲサウJr.大統領は、次のような挨拶文を寄せておられる。

「この度は、靖國神社及びNPO法人日本パラオ協会他関係の皆様方の御尽力により、「パラオの歴史と英霊展」が靖國神社の境内にて開催される運びとなりましたことは、パラオ共和国として誠に喜ばしいことであり、厚く御礼申し上げます。

一九二〇年、日本はミクロネシア地域の統治を国際連盟により委任され、その行政本部をパラオに置きました。それからの二十五年間、日本はパラオに産業技術と教育制度をもたらし、パラオの文化発展に寄与されました。

一方で、第二次世界大戦以前よりパラオには日本軍が常駐し、このために一九四四年～一九四五年にパラオも戦場になりました。今もパラオには、多くの日本兵が静かに眠っています。

第二次世界大戦後、パラオは一九九四年十月の独立までの間、アメリカ合衆国による国際連合の信託統治下に置かれました。それまでの日本の産業は失われましたが、今も日本の言葉や文化がパラオ文化の一部として残っています。

このように、光と影の両面があったパラオと日本の関係ですが、両国の長く深い関係は非常に重要なことと考えており、この友好関係が今後も長く続くことを願っております。

この展示会を通じて、日本の多くの人達がパラオのことをお知りになり、是非パラオにお越し下さいますよう、希望いたします。」（会報『特攻』第75号・平成20年5月発行にも関連記事掲載）

○パラオ訪問に当たっての天皇陛下のお言葉

本年は戦後70年に当たります。先の戦争では、太平洋の各地においても激しい戦闘が行われ、数知れぬ人命が失われました。祖国を守るべく戦地に赴き、帰らぬ身となった人々のことが深く偲ばれます。

私どもはこの節目の年に当たり、戦陣に倒れた幾多の人々の上を思いつつ、パラオ共和国を訪問いたします。

パラオ共和国は、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国と共に、第1次世界大戦まではドイツの植民地でしたが、戦後、ベルサイユ条約及び国際連盟の決定により、我が国の委任統治の下に置かれました。そしてパラオには南洋庁が置かれ、我が国から多くの人々が移住し、昭和10年頃には、島民の数より多い5万人を超える人々が、これらの島々に住むようになりました。

終戦の前年には、これらの地域で激しい戦闘が行われ、幾つもの島で日本

軍が玉砕しました。この度訪れるペリリュー島もその一つで、この戦いにおいて日本軍は約1万人、米軍は約1700人の戦死者を出しています。太平洋に浮かぶ美しい島々で、このような悲しい歴史があったことを、私どもは決して忘れてはならないと思います。

この度のパラオ共和国訪問が、両国間にこれまで築かれてきた友好協力関係の、更なる発展に寄与することを念願しています。私どもは、この機会に、この地域で亡くなった日米の死者を追悼するとともに、パラオの国の人々が、厳しい戦禍を体験したにもかかわらず、戦後に、慰霊碑や墓地の清掃、遺骨の収集などに尽力されてきたことに対し、大統領閣下始めパラオ国民に、心から謝意を表したいと思っております。

この訪問に際し、ミクロネシア連邦及びマーシャル諸島共和国の大統領ご夫妻が私どものパラオ国訪問に合わせてご来島になり、パラオ国大統領ご夫妻と共に、ペリリュー島にも同行してくださることを深く感謝しております。

終わりに、この訪問の実現に向け、関係者の尽力を得たことに対し、深く感謝の意を表します。

○晩餐会での天皇陛下のお言葉

戦後70年に当たる本年、皇后と共にパラオ共和国を訪問できましたことは、誠に感慨深く、ここにレメンゲサウ大統領閣下のこの度のご招待に対し、深く感謝の意を表します。今夕は、私どものために晩餐会を催してくださり、大統領閣下から丁重な歓迎の言葉を頂き、ありがとうございました。また、この訪問に合わせ、モリ・ミクロネシア連邦大統領ご夫妻、ロヤック・マーシャル諸島共和国大統領ご夫妻がここパラオをご訪問になり、今日、明日と続き、私どもと行動を共にしてくださることも誠にうれしく、心より感謝いたします。

なお、この度の訪問を前にして、ミクロネシア連邦を襲った台風の被害を耳にいたしました。ここに犠牲になられた方々を悼み、ご遺族へのお悔やみをお伝えするとともに、被害を受けた大勢の方々に心よりお見舞い申し上げます。地域の復興の一日も早いことを念願しております。

ミクロネシア地域は第1次世界大戦後、国際連盟の下で、日本の委任統治領になりました。パラオには、南洋庁が設置され、多くの日本人が移住してきました。移住した日本人はパラオの人々と交流を深め、協力して地域の発展に力を尽くしたと聞いております。クニオ・ナカムラ元大統領始め、今日貴国で活躍しておられる方々に日本語の名を持つ方が多いことも、長く深い交流の歴史を思い起こさせるものであり、私どもに親しみを感じさせます。

しかしながら、先の戦争においては、貴国を含むこの地域において日米の熾烈な戦闘が行われ、多くの人命が失われました。日本軍は貴国民に、安全な場所への疎開を勧める等、貴国民の安全に配慮したと言われておりますが、空襲や食糧難、疫病による犠牲者が生じたのは痛ましいことでした。ここパラオの地において、私どもは先の戦争で亡くなった全ての人々を追悼し、その遺族の歩んできた苦難の道をしのびたいと思います。

また、私どもは、この機会に、この地域の人々が、厳しい戦禍を体験したにもかかわらず、戦後に慰霊碑や墓地の管理、清掃、遺骨の収集などに尽力されたことに対して心から謝意を表します。

ミクロネシア3国と日本との外交関係が樹立されてから20年以上がたちました。今日、日本とこの地域との間では漁業や観光の分野を中心として関係が深まってきていることは誠に喜ばしいことです。今後それぞれの国との間で一層交流が盛んになることを願ってやみません。

ここに杯を挙げて、パラオ共和国大統領閣下、令夫人、ミクロネシア連邦大統領閣下、令夫人、及びマーシャル諸島共和国大統領閣下、令夫人のご健勝とそれぞれの国の国民の幸せを祈ります。

パラオ諸島は、環礁に囲まれたうえに多くの島があり、艦隊泊地として適していた。またペリリュー島の飛行場は大型機用滑走路が2本あり、ガドブス島の飛行場と合わせれば東洋一といわれる有力な航空基地といえた。

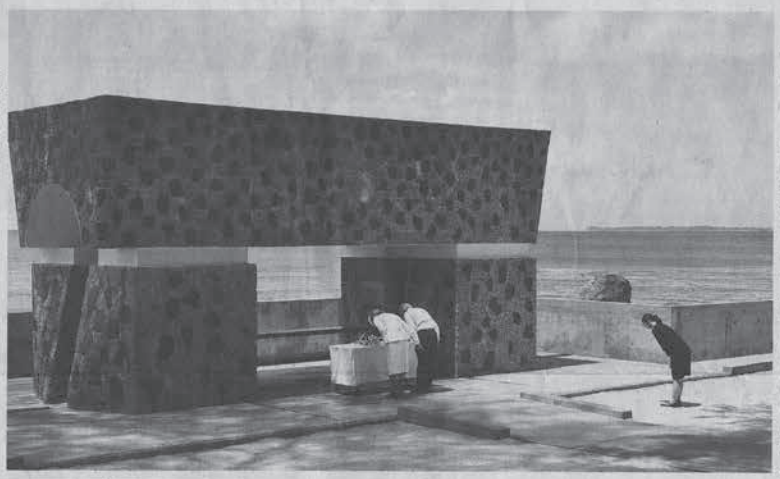
両陛下ペリリュー島慰霊

戦後70年

戦没者の碑に供花

【ペリリュー（パラオ）＝沖村豪、太田雅之】戦後70年の「慰霊の旅」としてパラオを訪問中の天皇、皇后両陛下は9日午前（日本時間同）、ペリリュー島の「西太平洋戦没者の碑」の前で供花された。同島や南方のアンガウル島が激戦地となり、パラオ全体で日米計約1万8000人が戦死。この日は、同国のレメンゲサウ大統領夫妻のほか、ミクロネシア連邦とマーシャル諸島の両大統領夫妻、旧日本軍兵士や遺族らも供花を見守った。〈関連記事13面〉

両陛下は同日午前10時40分過ぎ、日本の守備隊1万人余が玉砕したペリリュー島南端にある平和記念公園の「西太平洋戦没者の碑」に到着。供花台の前で一礼し、日本から持参した白菊の花を供えられた。さらに、南の方角を望み、ペリリュー島と同様に約1100人の守備隊が玉砕したアンガウル島に向かって拝礼された。



「西太平洋戦没者の碑」に供花し、黙礼される天皇、皇后両陛下（9日午前、パラオ・ペリリュー島で、右奥はアンガウル島）＝代表撮影

ペリリュー島　日本から約3000キロ南の太平洋にある南北約10キロ、東西約3キロの小島。パラオの州の一つで、パラオ本島の南約45キロに位置する。戦局が悪化した1944年9月15日、米軍が上陸作戦を開始。4万人以上の戦力を前に、計約1万人の日本守備隊が2か月余りの抗戦の末に玉砕した。日本側の生存者は約450人とされる。

米陸軍第81歩兵師団慰霊碑に花輪を供えられる天皇、皇后両陛下（9日午前、パラオ・ペリリュー島で）＝関口寛人撮影

この日の慰霊では、ペリリュー島の守備隊で、終戦を知らず2年近くも洞窟に潜んで戦い続けた34人の1人、土田喜代一さん（95）、さらに、アンガウル島で戦い、今はパラオに移住して戦死者の供養を続ける倉田洋二さん（88）も両陛下を見守った。西太平洋戦没者の碑は日本政府が1985年3月に建立。パラオ全体での戦没者を国籍を問わず慰霊している。

米軍慰霊碑にも

両陛下はこの後、上陸戦で米軍側にも多数の死傷者が出たオレンジ・ビーチ近くにある米陸軍第81歩兵師団慰霊碑に移動して花輪を供えた。日本人の慰霊や遺骨収集に協力してきた島民らとも懇談された。

両陛下は8日、コロール島神合に停泊した海上保安庁の大型巡視船「あきつしま」に宿泊し、9日朝、そのまま同船に搭載されたヘリコプターでペリリュー島に入られた。同日午後、再びヘリでパラオ本島のパラオ国際空港に移動し、夜、チャーター機で帰国される。

元兵士「戦友も喜んでいる」

土田喜代一さん（代表撮影）

両陛下がペリリュー島南端の「西太平洋戦没者の碑」に向かわれた9日午前、同島守備隊の数少ない生き残りの一人である土田さんも慰霊碑を訪れ、亡き戦友に両陛下の慰霊を報告した。

1944年9月15日、米軍の上陸作戦が始まった。圧倒的兵力で攻め込む米軍に対し、日本軍は人命を盾とした持久戦を強いられた。劣勢に立たされ、戦死者がふくれあがる中、上官が米軍の戦車隊に地雷を抱えて突っ込む3人の決死隊を募った。3人目の手が挙がらず、土田さんが躊躇していると、小寺という1等兵が手を挙げた。

「死ぬ時は潔くと両親に言われました」

銃の撃ち方も知らず、同僚からは「弱々しい」と見られていた男。だが、その「特攻」に志願し、散った。

「私の身代わりになって死んだ」。思い出す度に涙が流れる。

一緒に水をくみに行った兵長が目の前で撃たれたこともある。兵長は「土田、水をくれ、水を」とうめき、息絶えた。

過酷という言葉では表現できない戦いをくぐり抜け、終戦後も2年近く、島に巡らされた壕に隠れて戦った。生き抜いた34人の多くは鬼籍に入り、両陛下の慰霊という節目に立ち会えたのは土田さん一人だった。

「この島で行われた戦闘を伝えたい」。その思いで95歳の体にむち打ち、この日を迎えた。両陛下の慰霊を見守った後、「国のために戦った1万人の戦友たちも喜んでいると思います」と話した。

2015年４月９日　讀賣新聞夕刊より引用

「敗戦の証拠を見せろ」という土田上等水兵を、アンガウル島に戦闘機で運ぶ米兵。

念願パラオに「親しみ」

両陛下 初訪問

晩餐会であいさつ 「一層の交流願う」

【コロール（パラオ）＝沖村豪、太田雅之】天皇、皇后両陛下が8日、十数年来、変わらぬ思いで訪問を希望してきたパラオの地を踏まれた。パラオは太平洋戦争の激戦地であることに加え、終戦までの約30年間は日本の統治下に置かれるなど、深いつながりがある。天皇陛下はパラオ政府主催の晩餐会のあいさつで、両国の日系人の活躍などに触れ、「親しみを感じさせます」と語られた。

＜本文記事1面＞

パラオ国際空港に到着し、地元の子どもたちの歓迎を受けられる天皇、皇后両陛下（8日午後）＝代表撮影

晩餐会の冒頭、（左から）ミクロネシア連邦のモリ大統領夫妻、パラオのレメンゲサウ大統領夫妻、マーシャル諸島のロヤック大統領夫妻（右）と記念撮影に臨まれる天皇、皇后両陛下（8日午後）＝関口寛人撮影

熱烈な歓迎

8日午後、パラオ国際空港に到着した両陛下は、レメンゲサウ大統領夫妻の出迎えを受けられた。大統領とは昨年12月の来日以来の再会。天皇陛下は英語で「またお会いできてうれしいです」と笑顔で握手を交わされた。

空港では、地元の小学生ら約50人が出迎えた。左胸に両国国旗のバッジを着けた皇后さまは、小学生からランの花束を受け取り、笑顔を見せられた。

空港から中心地コロールに向かう沿道も、両国国旗の小旗を振る人々がずらり。「ようこそパラオへ」と日本語と英語で書かれた横断幕も掲げられ、両陛下を歓迎した。

パラオ国際サンゴ礁センターでは、ハゼの分類学者である天皇陛下のために近海のハゼを展示。陛下は皇后さまと楽しそうに見て回り、「パラオの固有種はたくさんいるのですか」などと質問された。

長く深い友情

約2万人が暮らすパラオは、国民の4人に1人が日系人とされる。この日、中心地コロールで開かれたパラオ政府主催の歓迎晩餐会には、1994年に米国から独立した当時の大統領、クニオ・ナカムラさん(71)や前駐日大使のミノル・ウエキさん(84)ら日系パラオ人の姿があった。

陛下は冒頭のあいさつで、パラオに移住した日本人が地域の発展に尽くしたことに触れ、「クニオ・ナカムラ元大統領はじめ、貴国で活躍しておられる方々に日本語の名を持つ方が多いことも、長く深い交流の歴史を思い起こさせるものであり、親しみを感じさせます」と語られた。

晩餐会にはパラオ政府の呼びかけで、同じく日本の委任統治領だったミクロネシア連邦のモリ大統領夫妻とマーシャル諸島のロヤック大統領夫妻も出席。陛下はこの3か国と日本の関係についても「一層交流が盛んになることを願ってやみません」と述べられた。

パラオのレメンゲサウ大統領も「私たちの文化や言語、価値観は今日でも日本の影響を受け続けています」とあいさつし、日本との深いつながりに言及した。

乾杯の後、披露されたのはパラオの伝統的なダンス。黄色い葉のイヤリングに髪飾りをつけた18人の女性ダンサーの華麗な踊りに、両陛下はにこやかに拍手を送られた。

両陛下が大統領夫妻と懇談された3か国

パラオ

大小200以上の島からなる。面積計約490平方キロメートル、人口約2万人。公用語はパラオ語、英語だが、「アシダイジョウブ（おいしい）」「アタマグルグル（混乱している）」など、日本語に由来する言葉が多く使われている

マーシャル諸島

29の環礁と五つの島からなり、面積計約180平方キロメートル、人口約5万3000人。ビキニ、エニウェトク両環礁では1946～58年、米国が原水爆実験を67回行い、54年にはビキニ環礁付近で日本の漁船「第五福竜丸」が被ばくした

ミクロネシア連邦

東西約2500キロメートルにわたり、607の島からなる。面積計約700平方キロメートル、人口約10万人。旧日本軍の沈没船があり、映画「タイタニック」の水中ロケで使われた。エマニュエル・モリ大統領は、戦前にトラック諸島に入植した高知県出身の日本人のひ孫

※3か国とも戦前は日本の委任統治、戦後は米国の信託統治を経て、1980～90年代に独立した

パラオ元大統領「長年の夢かなう」

天皇陛下がパラオ政府主催の歓迎晩餐会で名前を挙げられた元大統領のクニオ・ナカムラさん(71)は日系2世で、パラオの独立に奔走した人物だ。今年2月、パラオ・コロールで読売新聞の単独インタビューに応じ、「両陛下に訪問していただくという長年の夢がかなう」と語っていた。

1943年、パラオで三重県伊勢市出身の船大工の父とパラオ人の母の間に生まれた。戦後、日本に渡ったが、食糧難で生活は厳しく、再びパラオに戻った。

日系2世のクニオ・ナカムラさん＝佐々木紀明撮影

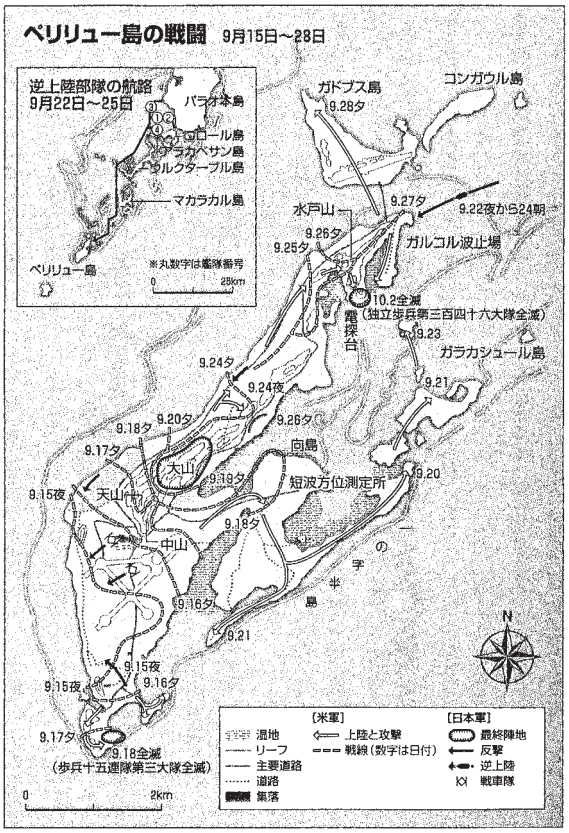
日米両国の激しい戦闘が繰り広げられたパラオでは、「敗戦国の人間」とさげすまれた。それをバネに、苦学してハワイ大学を卒業し、政治の世界に飛び込んだ。「勤勉な日系人としての誇り」が心の支えだった。

やがて、副大統領になると、戦後続いた米国の信託統治からの独立に奔走。大統領に就任した翌年の1994年に独立を実現させた。

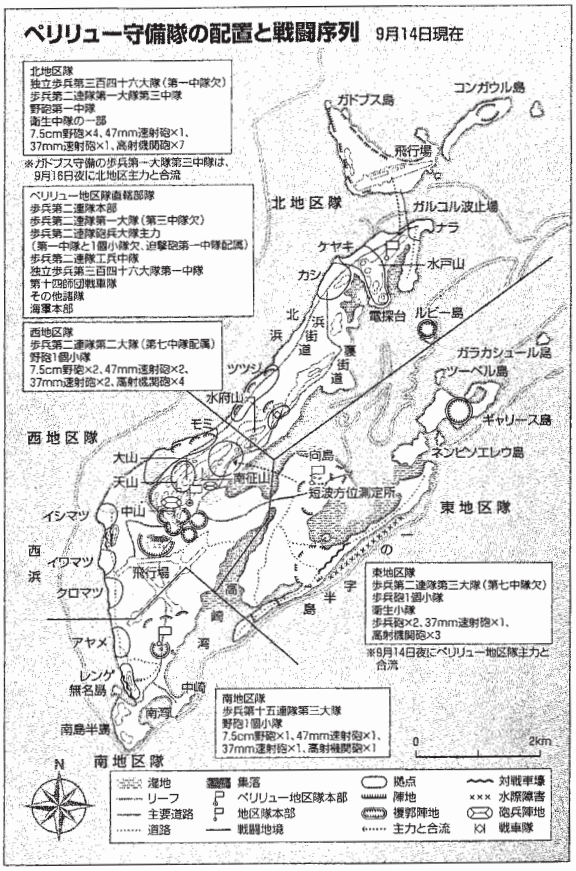
2000年、日本を公式訪問し、両陛下と昼食をともにした。独立間もない小国の大統領にも長時間にわたり、親しげに会話をされた両陛下に「リーダーとしてのあり方も学んだ」といい、長年、両陛下のパラオ訪問を望んできた。

両陛下は9日、ナカムラさんが育ったペリリュー島を慰霊のため訪問される。ナカムラさんは「訪問は、ペリリュー島に眠る旧日本兵の遺骨収集を前進させ、日本のパラオでの戦後に終止符を打つきっかけになる」と話している。

2015年４月９日　讀賣新聞朝刊より引用



水際での果敢な抵抗と反撃によって海兵隊を危機に陥れたペリリュー地区隊であったが、上陸２日目には山岳地帯に食い込まれ、５日目には中央（ウムルブロゴル）山地に追い込まれた。だが、ここから海兵隊の苦闘と敗北が始まる。



水戸歩兵第二連隊を基幹とするペリリュー守備隊は、水際に強固な拠点を築くとともに、山地にも持久のための陣地を準備した。（直轄部隊の各種火砲は省略）

日米両軍の死傷者数

		戦死	戦傷	戦死／戦傷計
日本軍	陸　軍	6,632名	190名	6,822名
	海　軍	3,390名	256名	3,646名
	軍　属	――		
	計	10,022名	446名	10,468名
米　軍	第1海兵師団	1,252名	5,142名	6,394名
	第81海兵師団	208名	1,185名	1,393名
	海　軍	158名	505名	663名
	計	1,618名	6,832名	8,450名

※日本軍軍属の死者は軍人戦死者に含む。生存者は負傷者に含まれる。

「ペ島の桜を讃える歌」

作詞　オキヤマ・トヨミ
ジョージ・シゲオ
作曲　トンミー・ウエンティ

一
激しく弾雨が　降り注ぎ
オレンジ浜を　血で染めた
強兵たちは　皆散って
ペ島は総て　墓となる

二
小さな異国の　この島を
死んでも守ると　誓いつつ
山なす敵を　迎え撃ち
弾射ち尽くし　食糧もない

四
日本の桜は　春いちど
見事に咲いて　明日は散る
ペ島の桜は　散り散りに
玉砕れども武勲は　永久に

八
戦友遺族の　皆さまに
永遠までも　かわりなく
必ず我等は　待ち望む
桜とともに　皆さまを

ネルソン・タッチとカミカゼ
—呉水交会編・大之木英雄寄稿・講演集を読んで—

陸士61期　飯田　正能

大之木英雄氏は、大正11年（１９２２年）呉市生まれ、昭和14年（１９３９年）東京商科大学（現・一橋大学）予科に入学、同大学本科3年在学中、昭和18年10月の文系在学生徴集延期臨時特例廃止（いわゆる学徒出陣）により同年12月海軍に入隊し、翌昭和19年5月、海軍第14期飛行専修予備学生として航空機操縦訓練に従事し、同年12月、零戦搭乗員として朝鮮・元山航空隊へ実戦配備に就き、終戦直前、筑波海軍航空隊へ移動中に終戦を迎え、同航空隊着任後解散。海軍中尉。復員後家業（建設業大之木組）に就き、家業のかたわら青年会議所での活動等を通じて海外事業への進出等を図り、昭和37年（１９６２年）家具会社大之木ダイモ工芸（現・大之木ダイモ）を設立。以後、海外進出等を併せ関連事業を拡大し、現在は大之木建設㈱、大之木ダイモ㈱、呉倉庫運輸㈱等大之木グループ代表として活動、現在に至る。この間、昭和62年（１９８７年）には元海軍第14期飛行専修予備学生が中心となり、代表者としてインドネシア・マネンボネン村に戦没者慰霊碑を建立し、以来慰霊活動の責任者として行事に携わり、また、昭和63年（１９８８年）6月から平成23年（２０１１年）4月まで23年間呉水交会会長を務め、その後は名誉会長に就任して現在に至る。氏は旧軍や海上自衛隊関連のみならず、幅広い経済活動を通じて特攻隊員を始めとする英霊の慰霊顕彰や啓発活動等に努めておられるが、文筆にも優れ、各種慰霊祭等における祭詞を始め、多くの講演録、回想、随想、手記論稿等、人々の胸を打つ感動の言葉や文章を寄せておられる。

その一端を次に紹介させて頂いた。これは、平成9年（１９９７年）7月9日、橋口収氏（昭和18年東大を繰上げ卒業した海軍主計短現10期、終戦時海軍主計大尉。戦後、大蔵省に入り、大蔵省主計局長、国土庁事務次官、公正取引委員会委員長、広島銀行頭取、同会長、相談役、広島商工会議所会頭等を歴任。大之木氏のコレス（同期）は主計短現11期であるから、1期先輩に当たる。）を団長とする広島日英協会の旅で、英国ポーツマスにある海軍博物館を訪れた時のことを記事にされたものである。

◇

○ポーツマス慕情

ポーツマスはロンドンの南方、バスで約二時間の地にある。

一一九四年、英国王リチャード一世の特許状により創設した最古の造船所で、爾来、造船並びに英国海軍の一大根拠地として栄えた所であり、今なお空母インヴィンシブルほかの母港であり、英国海軍の基地として、また、英国有数の港として活躍している所である。

一九四四年、第二次大戦の山場となった、連合軍のノルマンディ作戦（ヨーロッパ逆上陸・・Dディ）において、ここポーツマスは、コード名オペレーションロードの計画本部が置かれ、敵前上陸部隊と所要艦船の全軍が集結した場所である。

今見るこの海に五十三年前、数千隻の船が蝟集し、陸には数百万の将兵が待機して、迫り来るノルマンディ上陸作戦に武者震いしたであろうと想像するだけで血が湧くのを覚えた。この旅の初めからポーツマス行きは最大の楽しみだった。英国海軍博物館とネルソン提督がトラファルガー海戦で座乗した戦艦ヴィクトリー号の見学である。海軍航空隊の端くれだった私にとって日本海軍がその範とした英国海軍の全容を見ることができるのは心躍ることであった。

ネルソンは、一八〇五年のトラファルガーの海戦でフランス・スペイン連合艦隊と戦い、これを撃滅してジブラルタルを獲得し、名実共に大英帝国を確立し、いまだに英国民から絶大な尊敬を集めている国民的英雄である。中西輝政氏の『大英帝国衰亡史』によれば、トラファルガー海戦を含むナポレオン戦争は、大英帝国の興起と隆盛に貢献した三段跳びの戦いのうちの最後のジャンプに相当するもので、これによって英国は「パックス・ブリタニカ時代」という世界史の主役となったのである。

ネルソン記念室に入った。最初に眼に入ったのは、トラファルガーの海戦劈頭、旗艦ヴィクトリア号の檣頭（マスト）に翻った旗旒信号である。—England expect that everybody will do his duty（注・「英国は、諸子が各々その責任を全うすることを期待する」）—有名な言葉である。

この文脈は若きアメリカ大統領J・F・ケネディがその就任演説で「国家が何をしてくれるかではなく、国民一人ひとりが国家に何を貢献できるかを考えてもらいたい」と言ったのと同じ感覚であり、また、東郷平八郎聯合艦隊司令長官が日本海海戦でロシアのバ

ルチック艦隊との海戦劈頭、旗艦三笠のマストに掲げたZ旗「皇国ノ興廃コノ一戦ニアリ各員一層奮励努力セヨ」もその延長線上にある。いずれもまことに爽やかな文句である。

橋口団長から、「面白いものがあるよ」と教えられて眼を向けると、The Nelson Touch（Leadership）という説明板とトラファルガー海戦の大きな模型があった。ネルソンは戦術について何も言わず、部下の諸将の判断にまかせ、自らは第一線に立って敵に肉薄接触して戦う。これが「ネルソン・タッチ」と言うとある。

模型を見ると、正にネルソン・タッチである。英国海軍とフランス・スペイン連合軍とが各々見事な輪形陣を展開し、中心部で両軍は接触している。ネルソンのヴィクトリー号は英国艦隊の中央部にあって敵戦艦と全く舷々相摩して交戦し、英国海軍は連合軍を撃滅したが、ネルソンはフランス艦ルドウタブル号の狙撃兵の銃弾を受けて戦死する。

船室に運び込まれたネルソンは英国艦隊の大勝利の報を聞いて「神は誉むべきかな。我は我が義務を果たせり」とつぶやいて十五分後にこと切れたという。武将として当然とも思うが、また、粛然としたものを覚え、「これがネルソン・タッチなんだな、英国人のリーダーシップとはこれなんだな」と自分の胸に言い聞かせる。

ネルソン提督がいまだイギリス国民の尊敬を一身に集めている理由も単に世界の海を英国のものにして大英帝国を確固たるものにしたというだけでなく、このような体当たりのリーダーシップと武将らしい見事な最期を国民は崇めているんだなと理解できた。

ネルソン記念室を出て次の部屋へ入ったとき、私の眼は一枚の説明板に釘付けになった。

「KAMIKAZE」（神風）とある。言うまでもなく、あの神風―特攻機零戦である。当時は敵国だった英国が海軍記念館で日本軍の特攻をどう評価しているか、胸が動悸した。

日本では、時に「特攻は無駄死にだ」という無残な意見も多い。説明板を読んでみた。

It was an honour to do so, a sign of moral strength（特攻は栄誉ある行為であり、道義心の強さを示す象徴だった！）それだけだった。ほかに何の付け足しもない。沖縄の米艦に突入する零戦の写真が並べて展示されていた。思わず涙が出た。

多数の小学生が立ち止まってこの説明文を読み、写真を眺めていた。自国の英雄ネルソン提督に対する賛仰の念と同じレベルで日本の特攻に対して〝道義心（moral strength）を示す〟と敬意を表している。さすが大ブリテン、見事というほかない。さすがは日本帝国海軍が師と仰いだ英国海軍だなと心底感心した。同時に、昭和十六年十二月十日、マレー沖海戦で、この素晴らしい英国海軍の新鋭戦艦プリンス・オブ・ウェールズとレパルスを撃沈し、瞬時にして英国太平洋艦隊を壊滅せしめた日本の海軍航空隊のあの頃の気魄も大したものだったなと思ったものである。なんとなしに「敵こそ天晴れ」と思ったが、見学する英国民も日本の特攻に対して同じように「敵こそ天晴れ」と思っているのではないか。戦争の罪禍をあげ、これを避けるべきは当然である。

しかし、不幸にして戦いが起こった時、重要な問題は『全責任を全うするか否か』であろう。そして、国民の責任感昂揚についてどのような社会感覚を醸成するかによって今後の国家、民族の運命は決まるのではないか。繁栄と没落が―。

博物館を出ると、雲一つない碧空を背景にしてネルソンの座乗艦ヴィクトリア号が今なお現役として就役しており、近海海区の最高司令官の艦となっている。二世紀を経てなお現役としてネルソンの座乗艦を就役せしめているところに英国がネルソンをいかに敬愛しているか、ネルソン・タッチをジョン・ブルの魂としていかに大事に扱っているかがよくわかる。

ふと気がつくと、すごい見学者の数である。七、八歳の小学生の団体がぞろぞろと来る。先生が引率して説明している。この子供たちがネルソンの言葉「英国は諸子が各々その責任を全うすることを期待する」をどのように読み、ネルソン・タッチをどのように小さな胸に刻み込むのだろうか。

大英帝国は衰亡した。しかし、この子供たちが次々と成人し、ジョン・ブル魂を発揮するようになれば、どういうことになるだろうか。英国は、サッチャーの大改革以来どん底から着実に這い上がっている。これから先の英国はこの小学生たちが背負って行くのだろう。

江田島には素晴らしい海軍の教育参考館がある。見学者も多い。しかし、残念なことに教師に引率された小学生の団体が見学に来るのは見たことがない。一番見てもらいたいのは小学生なのに・・。英国と日本の学校教育の違い、社会感覚の違いに暗然たるものを覚える。このようなところから両国の

子供の稟性に差がついてくるのではないだろうか。

近い将来呉市に海事博物館ができる。今、関係者はその準備に大わらわだ。しかし、この呉市の海事博物館がポーツマスの海軍博物館のように、見る者をしてそれぞれの胸に国民としての責任を自覚し、民族、国家への思いを懐かせる機会に繋がるようなものになるだろうか。

一七一一年に建設されたヴィクトリー・ゲートをくぐって外に出た。一七七五年世界の海をかけめぐったキャプテン・クックも一八〇五年ネルソン提督の遺体もこの門をくぐって外に出た。久しぶりにいろいろな思いで胸が湧きかえった。

よい旅だった。七月十一日には日本へ帰る。

（平成九年旅行記より）

◇

以上が大之木氏の旅行記であるが、これを読まれた多くの日本人は、ネルソン提督とヴィクトリア号ないしはトラファルガー海戦と共に、東郷平八郎元帥と戦艦三笠（現・三笠記念館）ないしは日本海海戦のことを想起されたのではなかろうか。

前号の会報『特攻』（第１０４号・２月１日発行）の「靖國神社年越し詣で」の記事中に、今年は、大東亜戦争終結から70年、日露戦争終結から１１０年（したがって明治38年5月27日～28日の日本海海戦大勝利からも１１０年）の節目の年と書いた。国家、民族存亡の危機に当たり、先人たちの示した気概、赤誠心を今一度我々は肝に銘ずべきであろう。

ところで、東郷元帥はイギリス留学の経験があるだけでなく、ネルソン提督を尊敬し、ネルソンに関する勉強もしていた。したがって常に部下に対して自分の考えを伝え、仮に自分が戦死して指揮官がいなくなったとしても、指揮官が現存しているかのように戦える部隊にしておくといった哲学＝ネルソン・タッチにも造詣が深かったという（古庄幸一第26代海上幕僚長筆「日本海軍は人事で敗けた」『歴史通』２０１１年5月号掲載論文・ワック出版）。加えて、冷静沈着に上部の命令を遂行できるなど、戦に勝つための要因・素質を備えた軍人であった。

東郷元帥を聯合艦隊司令長官に抜擢したのは、当時の海軍大臣山本権兵衛であるが、日露開戦前夜に当たる明治36年12月、それまで舞鶴鎮守府の司令長官であった東郷少将を、本来定型的人事としては、当時常備艦隊司令長官であった日高壮之丞中将を充てるべきところ、適材適所を重んじた山本権兵衛の名人事によって、結果的に日本海海戦での帝国海軍の大勝利となった。米海軍の将官人事においても思いきった適材適所主義を見ることができる。大東亜戦争開戦当時、太平洋艦隊司令長官であったキンメル大将は、真珠湾攻撃によって更迭され、後任にニミッツ少将が大抜擢され、中将を飛び越えて大将に昇任して太平洋艦隊司令長官に就任した。

東郷元帥は「聖将」であるとともに戦場では常に「猛将」であった。日本海海戦の直前まで、智将と言われた秋山真之参謀はバルチック艦隊が対馬海峡と津軽海峡のいずれを通過するかで迷っていたが、東郷司令長官は迷わず、的確な判断を下した。

明治38年5月27日、１１０年前のこの日午前5時5分「敵艦見ユ」との通報を受け、直ちに全艦に出撃を命じた。東郷司令長官は、朝鮮半島と日本周辺の制海権を確保するため、ロシア艦隊の殲滅を期し、一隻たりともウラジオに逃亡させてはならないとの固い決意と自信をもってこの決戦に臨んだ。（我が聯合艦隊の作戦、攻撃は徹底していた。秋山真之参謀が立案した対馬からウラジオ間での昼間の主力決戦、駆逐艦・水雷艇による夜襲、翌日の追撃、を繰り返し、最後はウラジオ港口に敷設した機雷原に追い込んで触雷させるという「七段構えの戦法」に基づき、東郷司令長官の的確な判断、剛胆な指揮統率の下、指揮官・将兵一丸となり、「見敵必殺」の信念に燃えて、第1合戦から第10合戦まで間断なく戦った。加えて、我が聯合艦隊は、波荒き対馬海峡において徹底した射撃訓練を行うことにより戦闘力を強化し、更に射撃法にも独自性を持っていた。砲火指揮を艦橋で行い、それを各砲台に伝達することで統一した角度・射距離で撃つ、という方法により、角度・射距離を各砲台に依存していたロシア艦隊に勝る命中率を生み出した。更にまた、通常の射撃では破壊・殺傷力に優れた下瀬火薬を使用し、距離3千m以下の近接戦になると、敵艦の装甲部を貫く徹甲弾に切り替えた。本来危険な戦法とされた敵前回頭も、風向きや波の高さ、敵の射撃能力等を十分勘案した上での実行であった。その自信の程が「敵艦見ユトノ警報ニ接シ聯合艦隊ハ直チニ出撃セントス　本日天気晴朗ナレドモ波高シ」との大本営に向けた打電に込められている。）

午後1時45分、ロシア・バルチック艦隊の全容を発見するや、旗艦三笠の檣頭にZ旗が掲げられた。「皇國ノ興廃此ノ一戦ニアリ各員一層奮勵努力セ

ヨ」との旗旒信号である（この信号文は肉声となり、各部署の伝声管を通して各艦隊の全員に伝わった）。これこそ正に、彼のネルソン提督が、トラファルガーの海戦劈頭、旗艦ヴィクトリア号の檣頭に掲げた旗旒信号、「England expect that everybody will do his duty」（英国は、諸子が各々その責任を全うすることを期待する）の文言と軌を一にするものである。東郷司令長官は、その直後2時2分針路を南西に転じて左舷反航の態勢を取り、ロジェストウェンスキー中将指揮するロシア・バルチック艦隊に南下近接を開始し、急速に近付く敵艦隊を見詰めつつ、敵の先頭を圧迫する転舵の好機を待ち、2時5分、敵艦の射程内である距離8kmにおいて、T字（又はZ字）戦法の形に持っていくための左大回頭を下令した。いわゆる東郷ターンである（その後絶えず敵主力艦隊の先頭を押さえるため、この大回頭は一再ならず行われた）。眼前で突如大変針を開始した日本艦隊に対し、その弱点に乗じ、ロ中将は2時8分砲撃を下令した。先頭に立つ旗艦三笠には多数の砲弾が飛来し、林立する水柱に囲まれたが、東郷長官は弾雨の中を耐え進み、旗艦三笠の艦橋に立ちっ放しで至近の海中に落下する敵砲弾の水しぶきに濡れながら指揮を取っていた。この時三笠には、敵の砲弾三十数発が当たった。

日本海海戦における10次に及ぶ日露艦隊の戦闘図

2時10分、ロシア艦隊との距離6・4kmになるや一斉射撃をもって猛反撃に転じ、壮絶な主力決戦の火蓋が切られた。第1合戦である。その位置は、玄界灘の真っ只中に浮かぶ沖ノ島（福岡県宗像郡の宗像大社―天照大神の御神勅により「海北道中」に降臨し、国家鎮護の神とされた、天照大神の御子、宗像三女神を祀る―の長女神・田心姫（たごりひめの）神（かみ）を祀る「沖津宮」の御神体とされる）の北方至近の海域であった（崇敬心の篤い東郷元帥は、日本海海戦の大勝利は、宗像大神の御神助によるものと報謝し、後に「神光照海」の自筆編額と共に、旗艦三笠の艦橋にあった羅針儀を宗像大社に奉納され、同大社神宝館に展示されている）。

戦闘開始1時間後、ロシア艦隊の主力戦艦オスラービアは沈没、旗艦スワーロフは司令塔に被弾、大火災を生じ、ロ中将も重傷を負い、戦列から脱落した。その他の後続艦も被弾、火災発生し、勝敗はほぼ決定的となった。更に5時間に及ぶ昼間戦でロシアの新鋭戦艦のうち4隻が沈没し、残るアリヨールも大破、その他の艦も大損害を被った。ロ中将に替わったネボガトフ少将は残存艦隊を集めてウラジオストクに向け北上を開始したが日没とともに我が駆逐艦、水雷艇隊の肉薄攻撃によりロシアの戦艦2隻、装甲巡洋艦2隻が沈没他の艦艇も四散した。

翌28日の夜明けとともに我が艦隊は残敵掃討を開始し、ネ少将率いる残存艦隊を鬱陵島の南約160kmに包囲して降伏させ、また、ロシア駆逐艦ベドーウィに移乗して逃走しようとしていたロ中将とその幕僚を捕虜とし、佐世保に回航して同中将を海軍病院に収容した。5月29日朝、ロシア艦隊最後の装甲巡洋艦ドンスコイが自沈し、その主力艦はいずれも撃沈、自沈若しくは捕獲され、バルチック艦隊は消滅した（撃沈19隻・戦艦6、装甲巡洋艦3、海防艦1、巡洋艦1、駆逐艦4、その他4。捕獲7隻・戦艦2、海防艦2、駆逐艦1、その他2）。我が聯合艦隊の喪失艦艇は水雷艇3隻に止まり、また、ロシア側の戦死者4545人、捕虜6106人に対し、日本側の戦死者は116人という、世界海戦史上稀に見る圧倒的な大勝利を博した。

ネルソン精神の中核をなすものは、「見敵必殺」である。ネルソン提督の勇敢さは麾下の艦長始め将兵を奮い立たせた。当時の海戦においては、火薬の煙などが濛々と立ち込め、各艦の艦長は自分の艦がどのような状況の中に

あるのか判断に迷うことが多かったであろうが、ネルソン提督は「とにかく敵を見付けたら大砲を撃ち続ける。それが全体の戦局にどうであろうと目に入った敵を撃ち続けておれば軍功である」と言ったので、麾下の艦長には戦闘中に一切の迷いがなかったということである。この「見敵必殺」というネルソン提督の不動の方針を東郷元帥は受け継いでいたのである。

また、前記の『歴史通』同号に掲載された渡部昇一上智大学名誉教授の論考「忘れられた「見敵必殺」の精神―「さっと斬って、さっと引く」そんな〝美学〟で戦争を遂行したのが日本のエリートたちだった。驕慢と油断、戦に臨んで腰がひけ、艦をも惜しんだ〝海軍魂〟の実態―」の中で、真珠湾攻撃当時の航空参謀源田実中佐（後大佐、戦後参議院議員）も「要するに日本海軍はネルソン精神を忘れたから（敗けたの）です」と断言している。

「見敵必殺」の精神の欠如は、真珠湾攻撃で既に明らかになった。第一次攻撃、第二次攻撃は予想以上の大成功であった。戦艦だけでも撃沈3隻、大破4隻であり、２００機近い飛行機を破壊している。その時、航空母艦が港の中にいなかったことや、第三次攻撃について、山口多聞第二航空戦隊司令官（蒼龍、飛龍）から「出撃準備完了」の報告があったのに、機動部隊（第一航空艦隊）司令長官南雲中将と参謀長の草鹿少将は、すぐに引き返すことにした。その理由としては、第一次攻撃に比べて第二次攻撃の対空砲火が激しくなったことが言われている。しかし、日本側の損害未帰還機29機。その内訳は零戦９機、急降下爆撃機15機、雷撃機5機である。参加した水平爆撃機は第一次、第二次合計で１０３機であるが1機も失われていない。第三次攻撃を止めなければならないほどの被害ではない。第三次攻撃は陸上施設を目標にするものだったから、もしこの攻撃が行われていたら、海軍の工廠も石油タンクも破壊されていたと考えられるから、その後の勝敗に決定的な関係があるのである。

当時聯合艦隊参謀長であった宇垣纏少将（当時、後中将・第五航空艦隊司令長官、終戦と同時に沖縄に出撃し、戦死）が書き誌した日誌『戦藻録』の昭和16年12月9日火曜日にも次のように記されている。

「・・機動部隊（注・南雲第一航空艦隊）は戦果報告と同時に第一航路を執り、L点を経て帰投するの電昨夜到達す。泥棒の逃げ足と小成に安んずる弊なしとせず。僅かに三十機を損耗したる程度に於ては、戦果の拡大は最も重要なことなり・・依て同島（注・ミッドウェー）の攻撃を提案せる所、参謀連研究同意せり・・但自分が指揮官なりしせば、此際に於て更に部下を鞭撻して戦果を拡大、真珠湾を壊滅する迄やる決心なり。自分は自分、人は人なり。仍て本職の提案通り「ミッドウェー」空襲の原案に決し、次の電を１ＡＦ（注・第一航空艦隊）長官に発す。『機動部隊は帰途状況の許す限り「ミッドウェー」島を空襲し、之が再度使用を不能ならしむる如く徹底的撃破に努むべし』」

このことに関し、戦後15年経って出版されたアメリカ太平洋艦隊司令長官ニミッツ提督とポッター教授の『太平洋海戦史』（The Great Sea War）（邦訳は『ニミッツの太平洋海戦史』実松・富永共訳、恒文社、昭和37年発行）によると、真珠湾攻撃について「攻撃目標を艦船に集中した日本軍は、機械工場を無視し、修理施設には事実上、手をつけなかった。日本軍は湾内の近くにある燃料タンクに貯蔵されていた四五〇万バレルの重油を見逃した・・この燃料がなかったならば、艦隊は数ヵ月にわたって、真珠湾から作戦をおこすことは不可能であったろう」と書いている。

更にこの真珠湾攻撃の南雲機動艦隊は、聯合艦隊が帰り道にミッドウェー攻撃を命じているにも拘わらず、それを無視して、帰っているのである。この命令に「状況の許す限り」という保留が付いていたので、南雲中将と草鹿少将は、それを理由にミッドウェーを攻撃しないでさっさと帰ったのであった。この時、ミッドウェーを叩いておけば、後のミッドウェー海戦も全く逆になっていたはずである。宇垣中将は、前記『戦藻録』に次のように記している。「・・・帰路に於けるミッドウェー空襲は状況許す限りなりしも参謀長としては腹が立ちたり・・・飛行機二十九機、戦死五五名の外数名の犠牲者、ある程度の艦体兵器も亦若干の損傷あるも云ふに足らずとすべし」と。真珠湾に対する第三次攻撃もせず、帰途ミッドウェーを叩けとの命令にも従わずに帰還したのはなぜであろうか。『戦藻録』の編者たちは「・・・機動艦隊司令部の首脳は始めからこの作戦に反対だった。従って実行に方って、ややともすれば、被害妄想が頭を擡げて追撃の決行に熱意を欠いたのではあるまいか」と記している。更にその数ヵ月後の昭和17年5月7日～8日、世界最初の空母対空母の海戦と言われた珊瑚海海戦でも、井上成美中将の指揮す

る第四艦隊は、ポートモレスビー攻撃作戦のため、軽空母「祥鳳」と制式空母「翔鶴」、「瑞鶴」の3隻の空母を有していたが、アメリカ海軍の空母は、「ヨークタウン」と「レキシントン」の2隻のみであった。明らかに日本海軍の方が優勢と言うべきである。ところが、軽空母「祥鳳」がアメリカ軍の最初の攻撃で轟沈してしまい、日本側は艦爆12機、艦攻15機計27機で攻撃に向かったが、迎撃を受けて10機を失い、他の11機は着艦ミスで海に落ち、6機しか収容できなかった。翌8日の会戦は、日米ともに2隻の空母同士で戦い、3万3千トンの米空母「レキシントン」を撃沈し、「ヨークタウン」にも損傷を与えたが、日本側も「翔鶴」に爆弾が命中して火災を生じたため、飛行機は「瑞鶴」に収容した。この状況から第四艦隊司令長官の井上中将は、ポートモレスビー攻撃を止めにした。これについて宇垣中将は前記『戦藻録』に「・・茲に於て参謀連は憤慨して躍起となり、第四艦隊は祥鳳一艦の損失に依り全く敗戦思想に陥れり。戦果の拡大残敵の殲滅を計らざるべからずと参謀長宛電を以て迫る・・・遂に長官命令として四、六、十一艦隊長官に発令せり。自隊の損害を過大視して追撃を鈍り、戦果の拡大を期するに遺憾の点往々にして見るは、昔も今も其の軌を一にす。本日午後第二次攻撃は不能なるにせよ、敵空母は全滅せしめあれば・・随時攻撃を加へ、又夜戦決行を為さば克く之等を全滅し得たりしならん。今後において深く銘記すべきなり」と記している。第四艦隊司令長官井上成美中将（終戦3ヵ月前に大将に昇進）は、開戦前の昭和15年海軍航空本部長当時から「基地航空優位説」を唱え、島嶼航空基地を結合させた防衛網の構築により、米海軍を邀撃し、撃滅を図るとして、昭和16年1月、「新軍備計画」を及川古志郎海軍大臣に提出しているが、対米戦において　島嶼航空基地を重視し、これらの基地争奪戦が主作戦となる。つまり上陸作戦とその防御戦が主作戦となるというものであって主力艦同士の決戦は起きないとしている。また、空母建造について批判的で、基地航空、海上護衛（駆逐艦）、潜水艦の順に優先すべしと論じた。この「新軍備計画」が、海軍をして兵法無視の島嶼戦に駆り立て、空母建造を遅れさせ、空母艦隊決戦の敗北につながった、と言えるのではないか。

これに対して、米軍は、日本海軍による真珠湾奇襲の反省から、先ず空母を中心とする強力な機動部隊の急速な増強を図り、日本の空母艦隊の撃滅による制海権の確保と潜水艦部隊による補給路の遮断に努めた。日本海軍の空母艦隊の作戦・運用の拙さから、空母艦隊決戦は次々に米軍の勝利となり、潜水艦部隊の活躍もあって制海権は完全に米軍のものとなり、一方的に大量の兵力を集めて上陸作戦を行い、島嶼基地は次々に攻略されてしまった。

幾ら基地航空を優位として防備を固めても制海権を確保できなければ防衛は不可能であり、補給・補充の断たれた陸兵は如何に勇戦敢闘しても死を待つ以外にない。陸軍と海軍とでは戦略思想が全く異なる。陸軍は補給があっての軍隊であるが、海軍は補給がなくとも軍艦をもって長躯攻撃ができる。海軍によって置き去りにされ、補給を断たれた陸兵は最早戦闘能力はないのである。残るのは精神力しかない。

日本軍は、制海権の持つ戦略性を理解できず、敵の制海権下にある島嶼に不必要な戦力を送り、かつ放置して撤退させなかった。基地航空優位を信じて、大量の飛行機を島嶼飛行場に配置し、地上で破壊される愚を犯した。更にまた、潜水艦を本来の用途である輸送船団の破壊、補給路の遮断と残敵掃討に向かわせず、基地攻撃や補給などの任務に駆り立てることとなった。

第四艦隊司令長官井上中将は、開戦当初にも、ウエーキ等攻略戦に失敗しており、戦下手の提督であったにも拘わらず、海軍の代表的な智将としてもてはやされたのは、前記の「新軍備計画」の立案者であったこと、昭和17年10月～19年8月海軍兵学校校長、19年8月～20年5月海軍次官、20年5月海軍大将、軍事参議官といった経歴にもよると思われるが、戦後、阿川弘之氏による伝記（『井上成美』新潮社・昭和61年発行、同文庫本・平成4年12月発行）によるところが大きいと思われるが、阿川氏のこの伝記では、井上成美の東郷嫌いとともに、専ら東郷元帥にマイナス評価のことを書いている。

これに反して、前記のニミッツ提督は、その著『太平洋海戦史』の冒頭に「東郷平八郎提督を想う」という一文を寄せ、東郷元帥に対する温かい思い出を記している。ニミッツ提督は、日露戦争直後の明治38（1905）年の秋、海軍兵学校の少尉候補生として遠洋航海の途次日本を訪問し、東郷提督の計らいで、東京での天皇陛下主催の園遊会に招かれ、東郷提督に会う機会を得た。日本海海戦における聯合艦隊の指揮に示された卓越したリーダーシップとその勇気に対する尊敬のみならず、このような若い米海軍士官との交流を図った東郷提督の奥ゆかしさと

その素晴らしい知性が、ニミッツ提督の心を捉え、自身を東郷提督の「弟子」と認識していたとのことであり、昭和9（1934）年、東郷提督が薨去された時、海軍大佐となっていたニミッツ提督は、米国軍艦オーガスタの艦長として再び東京を訪問して、東郷提督の国葬に参列し、その後東郷家での自宅葬にも出席している。昭和20（1945）年の終戦直後にも、横須賀の三笠艦を訪問し、艦上に海兵隊の警備兵を配置させ、占領軍の水兵や海兵隊員による艦の破損や記念品の奪取を防止するよう命じた。また、昭和32（1957）年、ニミッツ提督は、日本の友人から三笠が荒廃した状態にあり、ダンスホールやバーとして使用されていることを知らされるや、東郷提督による偉大な勝利が、日本と世界の海軍の遺産の中で如何に重要であるかを喚起させる一文を雑誌・文藝春秋に寄稿した。そして三笠保存会が発足し、三笠の復元に動き出すための基金として、その記事の原稿料2万円（当時）を寄附したのである。ニミッツ提督によるこの厚意が、多くの日米両国人の心を動かし、日本政府関係者からの基金の拠出や米国将兵からの基金もあって、昭和36（1961）年5月27日、三笠は記念艦として立派に復元された。

終戦70年を巡る報道に思う
―頼りない「悲惨」一辺倒　如何に復興したかを伝えよ―

終戦70年の今年、先の戦争に関する多くの報道がなされている。いずれも戦争の被害が如何に大きなものであったかを生存者の証言を加え、二度と起こしてはいけないと訴える態度であり、誠に結構な事と考えている。しかし、後期高齢者になった筆者は、最近、報道している皆さんにやや頼りなさに似た感じを持つようになってきた。それは、報道する人達が、経済成長・豊穣（ほうじょう）の時代に育って、戦争とはやってはいけない悲惨なものという通常の社会心理を根拠とし、戦争の実体験がないことによるものと考えている。

筆者は昭和20年4月、「学童疎開」が行われようとする時、神戸から愛知県の中都市の母親の故郷へ疎開した。一家をあげての引っ越しである。小学校2年生の転校は大変で、言葉の違い・いじめなど通り一遍の「子供の苦労」を味わったが、馴染む間もなく6月19日この街はB29の夜間空襲で大被害を受ける。

その夜は叩き起こされ、「街が燃えているので、郊外の母親の実家まで避難する」と告げられる。事情も解らぬまま、筆者は父親に、2歳上の兄は母親に手を引かれ家を出る。予め準備していた小型の皮のトランク2個を両親が肩からバンドで吊るしている他は何も持ち出せない状況だった。郊外に通ずる街道は避難民の洪水、暗闇の中、黙々と人波が続いた。父親の手が離れたら混雑に埋没するであろうことは理解でき、必死にしがみ付いていた。途中で自暴自棄になる人や、子供とはぐれ半狂乱になった人を見ながら、長蛇の列は、押し合いへし合いのろのろと進んだ。最後は非常持ち出しのトランクまで投げ捨てて、身一つで実家に到着した。

約3キロ、数時間の恐ろしい逃避行だった。二度と味わいたくない戦災ならではの経験である。父親が実家の伯父に、現金・貴重品・通帳はじめ一切の財産まで投棄してきたことを報告。二人で男らしく「身軽になったが、無事で何より」と笑っていたのが印象深かった。以降1年半、手厚い庇護（ひご）の下、田舎生活を満喫し、神戸に帰るが、こちらの家も焼失、ダブルパンチの状態で文字通り斜陽族、タケノコ生活を味わった。

今風の報道姿勢からみると、哀れをとどめる年齢・境遇・体験であったと見えるが、実はそうではない。筆者はこの1年半の体験が、その後の人生に測り知れない大きな恩恵を与えてくれたものと今でも感慨に身を委ねている。おそらくは、この体験無くしては、人生もっと浅薄なものに推移したのではないかと考えている。

恩恵の最たるものを紹介する。最初の感動は、先述した避難経路で投棄した非常持ち出しのトランクが、翌日騒ぎも収まらぬうちに畑の地主と駐在さんがリヤカーに載せて届けてくれたのである。皮のトランクに外国ホテルのレッテルがべたべた貼ってある珍しい物、村長さんの所へ避難してきたハイカラさんの物に違いないという判断だったようである。なんと言う親切なそして純朴な雰囲気であることか。避難民が最後まで持っていたものは貴重品、返ってこなくて当たり前ではないか。都会育ちの父は感動を隠さなかった。子供の我々にも深く心に残った。

この「地方の人達への信頼感」は、長ずるに及び地方勤務をする上で、基本心情として大いに役立ったと考えている。その後、田園環境での1年半、いたずら悪童の限りを尽くした生活のなかで、田植えから収穫に至る農村の田畑作業を旧農地制度の最後の年、たっぷりと味わった。地域に伝わる伝

統の夏祭り、秋祭りも素晴らしく忘れられない体験であった。秋祭りの神楽では、伯父の尽力で兄は「お稚児さん」、小生は「大太鼓」を演じたが、毎夜お宮に集まって受けた特訓が懐かしい。

さらに有り難いのは、夏の一日中裸で川遊び、泥鰌獲り、食用カエルを求めて夜な夜な出撃といった地方ならではの生活を通じ、人一倍強い身体と、よそ者扱いを克服する精神力を与えられたことである。二度の夏の特訓で何回も溺れながら、腕白の中でも人後におちぬ泳ぎ手になったこともあり、中学・高校と水泳部生活に現を抜かすことになったが、これも「疎開生活」の恩恵と言えるだろう。

昭和21年春、本家の従姉が結婚した。婿殿は、学徒出陣・飛行機乗りという最も犠牲の大きかった期の生き残り。子供心に映った婿殿は、白皙長身、挙措の格好良いことこの上もない。「お義兄さん、お義兄さん」とへばりついたが、筆者のその後の進路に影響した憧憬は否定できない。

こうしてみると、戦争を通じ随分ひどい目に遭い、現代の人達から見ると、哀れな境遇に置かれた典型であった過去であるが、実は逆境に落ちたがゆえに、それなりの貴重な体験をし、その後の人間としての成長に十分の対価を頂いたというのが、筆者の率直な所見である。人間如何なる試練に遭おうとも、如何に教訓を得ていくかが最も大切で、その後の人生を左右する。

この様な目で見ると、終戦70年に関する報道について、「悲惨・逆境」と言った通り一遍の姿勢のみではなく、「破綻」「無残」の状況から人々は何を得て、如何に復興していったかという、将来につながる側面を持ってほしいと考えている。実はその姿勢が、現在東北大震災からの復興についても、良い影響を与えるものと考えている。

（ペンネーム・蒼蒼子）

再び「ノーブレス・オブリージュ（no-blesse o-blige）とは、学徒出陣に思う」

陸士61期　飯田　正能

当顕彰会の会報『特攻』第103号（平成27年1月発行）に、筆者が書いた標題の記事が掲載された。学徒出陣により、祖国の危機、民族の存亡に際し、特攻に身を投じてこれを護らんとした学徒達こそ、ノーブレス・オブリージュの実践者であるとして、その崇高な志を称え、感謝の気持ちを表さんとした。

ところが、この4月12日の読売新聞の日曜版「名言巡礼」に「託された平和へのバトン」「遺筆と異なる心の叫び」と題して、知覧特攻平和会館に展示してある慶応大学出身の出陣学徒・上原良司少尉（当時22歳）の「必中必沈」の遺書とは違う率直な思いを吐露した「所感」として、〈空の特攻隊のパイロットは一器械に過ぎぬ（中略）理性をもって考えたなら実に考えられぬ事で（中略）一器械である吾人は何も言う権利もありませんが、ただ願わくば愛する日本を偉大ならしめられん事を、国民の方々にお願いするのみです〉と書き残した言葉を、名言として大きく報道しているが、これをもって大多数の出陣学徒達が、同じ想いで、出撃したと取られることを筆者は憂えるものである。『特攻』第103号に掲記したように、戦後逸早く東京大学消費生活協同組合出版部から刊行された（昭和24年）戦没学生の遺稿集『きけ　わだつみのこえ』は、GHQの占領政策に呼応した、多分に意図的な反戦・反軍的な内容のものが多い。日本戦没学生記念会（わだつみ会）が編集したものであるが、同会では、終戦50周年を記念して、『新版　きけ　わだつみのこえ』を岩波文庫から出版している（その中に掲記されている「自衛隊海外派兵に抗議するわだつみ会声明」、「学徒出陣五十周年にあたっての声明　わだつみのこえは今なにを求めるか」及び「学徒出陣五十周年にあたってのアピール」他をご参考までに後ろに掲記する）が、旧版では、前記の上原良司少尉の「遺書」を遺稿本文の最初に掲載していたが、新版では、同少尉が出撃前に陸軍報道班員に託した「所感」を冒頭に掲げている。

また、わだつみ会編『学徒出陣』が、1993（平成5）年8月に、同じく岩波書店から刊行されているが、その中に収録されている「生き残ったわれ

ら」の論稿2編をご参考までに後ろに掲記する。これらの主張・論稿に対するご感想・ご意見等を事務局宛にお寄せいただければ幸いである。

◇

○自衛隊海外派兵に抗議するわだつみ会声明

「それでも行ってはならない」

一　ソ連崩壊後の「世界秩序」とは

人が人を殺すことを命ずる国家の行為が戦争である。人類の歴史とともに古い戦争は、「自衛・正義・平和のため」と正当化されてきた。美しい名目で、国家という強者、つまり国家の指導者層が個人の生命を奪い、また奪わせてきたのだ。

米ソ間の「冷たい戦争」は終わっても、世界平和がよみがえるどころか、「熱い戦争」が次々と起こるようになった。旧ソ連諸民族間の、また旧ユーゴスラビア内諸民族の血で血を洗う闘争などのうち、最も端的な例が湾岸戦争である。これは一国に対する大国連合軍の有無を言わさぬ「制裁」だったが、他の地域紛争に対しても「国際的な調停・介入」が進行もしくは計画中である。

変わったのは名目だけで、国連安保理事会の決議を盾に「新世界秩序・平和維持のため」と謳われる。何のことはない。実態は大国が国連のイニシアチブをとり、紛争をかえって拡大し、「調停・平和維持・制裁」という名の戦争を開始しているのだ。だれの利益のためにか？強国の指導者たちの思い上がりではないのか？引き換えに、強国に属する兵士はもちろん、「調停・制裁」される国々の兵士・民衆の犠牲は、戦争テクノロジーの開発とともに、いよいよ悲惨となっている。地球環境の悪化も加速されていく。

二　平和維持という名の戦争へ

この国際社会の動きを日本に照らしてみると、廃案とされた「国連平和協力法案」、莫大な戦費提供による湾岸戦争への参戦、「ＰＫＯ法」のゴリ押し成立、そしてカンボジアへの自衛隊派兵の流れに見事に符合する。

日本は戦後の一九四六年、「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して」、「戦力」はむろん「戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」と決意した。にもかかわらず、今や一転、軍事大国の一員として「国連による平和維持」というまことに美しい名のもとに、軍事小国内、あるいは軍事小国間の紛争に「過剰介入」する道を開いた。憲法を踏みにじったこの暴挙自体が戦闘行為の挑発となり、古来繰り返されてきたとおり、指導層の利益のための戦争につながる。

だが、アジアのなかの日本の地位を考えると、単なる繰り返しとはとても言えない。一九一〇年の「日韓併合」以来、とりわけ「アジア・太平洋戦争」のあいだ、日本軍がこの地域の民衆に与えた犠牲はとうてい筆舌につくしがたい。フランス植民地下にあったカンボジアもまた、日本軍が侵略した国の一つである。だからこそ、指導者同士のレベルで天皇の「東南アジア歴訪・訪中」がつつがなく行われようとも、日本人が背負っている日本に対する憎しみの感情が黒々とよどんでいる。折あらば、この感情が爆発するであろうことは、戦後半世紀近く経った今も、「従軍慰安婦」問題はじめ被害者や遺族から戦後補償の要求が続々突きつけられている現実から明らかである。自衛隊はまさに日本の軍隊であり、軍隊の海外派兵として迎えられるのも当然のことであろう。

一兵たりとも海外に送らない―私たちの選択はこれ以外にありえない。兵士や軍隊をもってでなく、平和的手段であたる以外に解決は得られない。そうしない限り、永遠に戦争の悪循環を断ち切ることはできない。

三　派兵拒否は平和への道

今カンボジアに派遣されようとしている自衛隊員と家族の方々に訴えたい。

あらゆる手段を尽くして派遣を断っていただきたい。憲法はあなた方の良心の自由を保証している。国民の多くがあなたやあなたの夫や息子さんの出撃に反対している。第二次大戦後の戦犯裁判の判例も、非人道的・不当な上官の命令を拒否することは権利であるどころか、義務であると教えている。それでもあなた方は行くのだろうか？

あなた方もテレビを通じ、先遣隊の出動を見送る母や妻の頬に流れ落ちる涙を見たのではなかろうか？現行の自衛隊法においてすら、海外出動命令に従う義務はないのに、それでもやはり、あなたは方は戦地におもむくのだろうか？

過去のどんな戦争でも最も大きい犠牲となったのは民衆であり、あなた方若い一般兵士である。すでに現代の古典となった『きけ　わだつみのこえ』のなかに、たとえば「俺の子供はもう軍人にはしない、軍人にだけは・・・平和だ、平和の世界が一番だ」のような痛切な言葉が遺されている。この願い、この叫びも、ごく小規模な「出兵」から始まった侵略戦争の行き着いた時

点であげられた声だった。

国民が忘れてならないこの歴史的教訓と、戦前・戦中・戦後への深い反省から学んだ不戦の誓いを、あなた方が私たちとともにし、「軍隊」の海外派兵に加わることなく、憲法に沿って世界平和へ真に貢献する道を私たちとも求めるよう熱望する。

一九九二年十月十二日

日本戦没学生記念会（わだつみ会）

◇

○学徒出陣五十周年にあたっての声明

わだつみのこえは今なにを求めるか

一九四三年（昭和十八年）、太平洋戦争はいよいよ苛烈で、まさに国家存亡のとき、学生もペンを捨てて入隊せよという昭和天皇の命令で、いわゆる第一次学徒出陣が行われてから、本年一九九三年はまさに半世紀目に当たります。

全国の旧制大学、高等学校、専門学校の学生生徒で、二十歳に達して徴兵猶予の特典を与えられていた男子は、直接戦争に役立つ学問をしていると考えられた理科系や教育系を除いて、文科系（法文経）全員が徴兵猶予を停止され、学業半ばで陸海空の軍人として召集されました。まさに近代日本の高等教育史の断絶という未曾有の重大事態に立ち至ったのです。

緒戦の勝利は、一部の反対論・懐疑論を押しつぶして国民的狂喜を以て迎えられましたが、その後、政府の徹底的報道管制によって捷報ばかり喧伝されるにも拘らず、ガダルカナル島の転進（敗退とはいわない）、アッツ島の玉砕以降、連合軍の反抗が次第に本土に迫って来たことを、国民も若い学生も実感するようになっていました。

日中戦争の泥沼から東亜各地への進攻（侵略とはいわない）作戦は、東洋平和という名目を掲げ、西側諸国の抑圧からアジアを解放し、日本とともに共存共栄の道を歩もうというものでありました。開戦の翌年から既に連合軍の反撃ははじまり、占領各国からの敗退、本土危うしの危惧の中での学徒出陣が、あらひと神、天皇によって命じられたのです。「国家が危ない。民族存亡のとき。」明治以来の国家教育、思想の徹底的とりしまり、国際的情報からの遮断、死を恐れることを恥とする青年の客気、天皇制や国家体制への批判もとざされて久しい社会の空気、それらの中で、学徒は悲壮な思いで、幾多の懐疑と不安を胸に、多くは黙々と、国家や同胞のために己を捧げなければならないと言い聞かせながら、営門をくぐったのでした。少なくともこの戦争で死ぬのは我々の世代だけにとどめたいと念願し、学生の特典を持たない同世代の友人知己がわれわれに先立って戦死していく当時の現実に耐えがたい思いを秘めていたのです。親兄弟、愛する人たち、敬愛する教師や友人との別離、人間らしい生活が根こそぎ奪いとられる絶望感が、行く者にも送る者にもどんなにつらいものであったかは、言うまでもありません。

一九四四年、四五年へと、戦争は敗戦に向ってころげ落ちる石のように、悲劇の歴史をたどりました。後に続く学生も次々に召集され、国民一般も体さえ使えるなら、老いも若きも女性も子どもも、戦場に工場にかりたてられました。多くの者が死に傷つき、また広く、東南アジア・太平洋一帯で多くの者を殺し傷つけました。被害者であり、また加害者でもあった戦争体験です。

いくさで死んだ学生が、遺書として、「わだつみのこえ」を残しました。

生き残った出陣学徒、遺族、歴史を学び戦後半世紀近い日本の歴史を眺めてきた者たちにとって、戦後日本は何だったのでしょう。

敗戦という日本歴史上例を見ない大きな衝撃の中から、生きる日々の営みに必死になりながらも、戦争には絶対反対の姿勢を守り、平和で心豊かな文化国家をつくろう。これがまさに日本の戦後の生き方の原点であり、日本国憲法が広く支持された理由でした。

戦力は一切保持しない。たとえ自衛のためであっても、戦争には手を出さない。これまでの世界の戦争はことごとく自衛のためということを理由にしているではないかと、堂々ととなえたのは、保守党の最高指導者でした。朝鮮戦争で警察予備隊が作られたが、これは軍隊ではないと称し、いつのまにか、名前は保安隊から遂に自衛隊に転化します。世界も、いや、日本人でさえ、今では自衛隊は当然軍隊だと考えています。はじめは戦車ですら「特車」と呼びながら増強をつづけ、陸海空軍の戦力は現在まさに世界の最新鋭装備となっています。そのくせ、政府や権力者たちは戦争責任や戦後補償の問題にほとんど頬かぶりのままです。

対岸の朝鮮戦争、その後のベトナム戦争の後方基地として、「特需」は日本の経済をよみがえらせ、国民のふところを貧しさから解放し、今日の経済発展の基礎をつくりあげました。戦争はいやだが、他国の戦争で多くの人たちが殺し殺されるのは黙認します。核兵器は持たないし、米軍にも持ち込ま

せないと、政府は終始一貫して約束していますが、これも嘘でありごまかしであることを日本国民はよく知っています。

自衛隊は国の自衛のためで、北の脅威に対処するというのが、長い間の政府の言明でした。にもかかわらず、絶対に海外派遣はあり得ないという固い公約は、冷戦終結後の今に至って、またしても平然と破棄されました。カンボジアの派兵は平和再建のためで、国連の要請によるし、過去の戦争とは違うし、あくまで東洋平和のためとして、若い自衛隊員は硝煙消えやらぬ現地に派兵されました。すべてが虚偽の連続であり、真実の隠蔽であって、これで真の国際信頼が得られ、国際貢献が果たされるというのでしょうか。今年に入って「皇室外交」の新たな展開も、この歩調にあわせた足どりとはいえないでしょうか。

湾岸戦争への支援、後方基地の役割も記憶に新しいことでした。一方的に正義の戦争というのがあり得るのか。「平和」や「人道」を名目とする戦争が許されて、われひと共に殺し殺され、生命も心も傷つけ合うことがくり返されていいのか。特に前途に輝かしい可能性を持っている若者が、国家の権威によって命令され、或は勧奨されて、国権の発動たる戦争はもちろんのこと、武力による威嚇や武力の行使に加わることは絶対見過ごしてはならないと思います。

学徒出陣から五十年目の現在、再び「派兵時代」に突入したことは、戦後の歴史の大きな転換点に立ったことだと考えられます。すでに自衛隊員で大学二部在学中の若者たちがやむなく学業を捨てて派兵の道を選ばざるをえませんでした。国家の指導者が世界平和のため、国家のためという名目で、これからの若者たちに命を捧げることを奨励し、他国の武力紛争に加担することを当然とする方向に日本を向けることがこのまま黙認されてよいのか。自衛隊員の残した留守家族の悲しみと憂慮はまさに戦前の出征兵士と「銃後」の姿の再現にほかならず、私たちは前線の隊員たちに「早く還ってこい」と叫ばずにはいられません。

かつてのあの戦争で死んで行った若者たちに対し、真の平和に徹する日本でなくて、私たちは何と申し開きしたらよいのですか。もし彼らが生き残っていたならば、彼らが知り得なかった多くのことを世界から学び、二度と戦争に加担してはならないと今も叫び続け、私どもを叱咤激励して、ともに起ち上がってくれたであろうと私どもは信じています。

生き残ったことによって戦争に対する反省と批判を学んだ私どもは、かつて戦争抑止に立ち上がれなかった悔いを今度こそ国民に語りかけ、国民的運動を展開しなければならないと念願し、とりわけ戦争を知らない若い世代の諸兄姉に対して強く訴えるものであります。

一九九三年二月五日

日本戦没学生記念会（わだつみ会）

出陣学徒有志一同

大塚　雅彦　小沢　一彦
熊谷　直孝　久米　茂
神津　直次　後藤　弘
鈴木　均　高畠　平
故平井　啓之　星野安三郎
山下　肇　（五十音順）

◇

○学徒出陣五十周年にあたってのアピール

派兵時代の今こそわだつみのこえに聴こう

忘れがたい学徒出陣から五十年、なんという時代のなかで、この年を迎えていることだろう。

外にあっては、我々の反対にもかかわらず、強行されたカンボジアにおける「国連ＰＫＯ」への自衛隊参加は、確実に武力抗争拡大のメカニズムを加速させた。銃弾に倒れるのはボランティアだけではない、また日本人だけではない、まずカンボジア住民であるという当り前の事実をしっかり思い起こそうではないか。日本国家は、学徒出陣まで行き着いた約五十年前と同じように、――しかし今度は、「経済大国」から「軍事大国」への変身途上で――性懲りもなく出口のない泥沼にはまりこもうとしている。カンボジアから撤兵するどころか、今度はモザンビークでの「国連ＰＫＯ」への自衛隊派遣を決定する有様だ。ＰＫＯとは「平和維持作戦」の謂いであり、形を変えた戦争行為であることは明らかだが、大学（夜間部）に在学する自衛隊員が昨秋派遣されたことにより、形を変えた学徒出陣が、徴兵制なしに、すでに開始されている事実に特に注意を喚起したい。

内では、出陣学徒たちの払った犠牲や死が彼我幾千万戦争犠牲者の血や涙と表裏の関係で交じりあっている厳粛な事実に思いをいたさず、戦友の霊を祀るとの美名のもと、実は安価なヒロイズム賛美や懐旧の念から、あるいは自己正当化の意図もあらわに「学徒出陣」を大仰に記念する企てが後を絶たない。学徒出陣五十周年の今年は、靖国神社に集団参拝するなど特にその風

潮が顕著だが、こうした行為は、アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に対する配慮と想像力を欠くだけでなく、国家のため身命を捧げさせられた戦友を愚弄するものとして警告を発したい。

日本戦没学生の手記『きけ　わだつみのこえ』を出発点に、われわれが四十年余にわたり彼らの遺念を受け継ぎ伝える活動をつづけてきたのは、過去を過去として葬るためでなく、現在と未来において「わだつみの悲劇」が繰り返されることのないよう願ってのことであった。現在・未来に平和を創り出そうとするなら、どんなに痛み多く恥多いものであっても、過去の教訓を直視し、そこから出発する以外にないのだ。

平和の名のもとに始められなかった戦争はなく、正義の名によって始められなかった戦争もない。これは過去と同じく、今日も真実である。「大東亜共栄圏」のための戦争が誤っていたのとまったく同様に、「国連の秩序」を紛争国・紛争地域とその民衆に押し付ける作戦も誤りである。われわれはそのような企てからみずからの身を引き離すとともに、政府に対し政策の変更を迫らなければならない。

このような考え方から、さきに二月、本会の出陣学徒有志による声明が発表され、大きな反響を呼んでいるが、声明から溢れ出る出陣学徒たちの戦中戦後への自責の念を引き受けつつ、本会もまた、この一年、日本人が過去から負っている課題を現代の課題と結びつけ、不戦の誓いを貫くため精一杯の努力を傾ける意志をここに表明する。

若い世代の方々、特に学生諸君に訴えたい。今年を不戦・反戦の意識を深め広げる機会としようではないかと。まず『きけ　わだつみのこえ』を読み、その感想を書き記し、あるいは語りあってはどうか。戦没学生の手記は、国家、戦争、愛、青春、生と死、さらに当時は存在しない言葉だったが、人権について考える数々の鍵を与えてくれるだろう。

学徒出陣という出来事の真実を掘り下げ、今日的な教訓を引き出す作業はまだまだ終わっていない。手近な例からあげても、出陣学徒からの聞き書きや記録の収集、講演会・映画会の組織など、個人や少人数でできることは多い。教育関係者の方々も、講義やゼミで取り上げ、あるいは学生諸君と協力して、積極的に調査研究を進めていただきたい。全国各地で、また大学や高校等で推進されるであろうさまざまな企画に、講師の派遣・展示用パネルや映画「きけわだつみの声」の貸出等を通じて、わだつみ会は喜んで協力したい。会独自でもこのテーマに関する図書出版や数次の集会などを準備しているが、肝心なことは、もろもろの試みが呼びかけあい答えあい、大きなうねりとなって、たとえば「自衛隊員よ、還ってこい」の声の実現につながることである。

これらの動きを信じ、その可能性に依拠して、わだつみ会は、五十年前の学徒出陣の歴史的経験を――それ以前の過程と今日にいたる過程を含め――蓄積して次の五十年につなげるため、さらにいえば、忘れられようとする歴史をこの国の土壌に定着させるために、「わだつみ記念館」の設立に一歩を踏み出すことを決意した。これはなによりも本会の責務であろうが、とうてい会単独でなしうることでもない。詳細な計画は近く発表する予定であるが、展示品の収集など内容の面と、基金・土地などハード面の双方にわたって、各位のご協力を呼びかけ仰ぐ次第である。

忘却してはならない。賛美はなおのこと筋違いである。あくまで学徒出陣の経験にこだわり、世代の手から手へと不戦・反戦の焔をリレーしていこうではないか。

一九九三年五月十一日

日本戦没学生記念会（わだつみ会）

◇

○死の哲学の悲劇―迷ったら死ね―

海軍第13期飛行科予備学生　後藤　弘

（わだつみ会編『学徒出陣』岩波書店　1993年8月発行　生き残ったわれら―4）

海軍の十三期飛行予備学生として土浦海軍航空隊に入隊してから満五〇年になる。この時入隊した同期生は三重海軍航空隊と合わせて五二〇〇名である。その約三一パーセントの一六三一名が戦死または殉職をしている。私は戦闘機教程を筑波海軍航空隊で修業したが、この時の同期生は一一〇名、うち五七パーセントの六三名が戦死（含殉職）をした。平均の倍に近い率である。特攻隊の戦死者も二六名という異常な高率となっている。目の前に写真入りの名簿があるが、戦没者は五〇年前の青春のままでまことに初々しい。

海軍では航空訓練と共に死に対する精神教育を常時行っていた。昭和一八年九月三〇日に任命式があったが、その時の教育主任の訓示は「諸君の命は今日限りで海軍が貰った」ということであったし、分隊長の訓示も「母親以外に女に手紙を出すことを禁ずる、出したい者は直接俺に持ってこい、死に

にゆく者に女は必要なし」ということであった。

一〇月四日に始業式があり、われわれの最も親しい上官である分隊士が言ったことも「日本は今危急存亡の秋である。国体護持のため身を捧げよ」であった。一〇月九日の夜、飛行長の「比島航空作戦」の話があったが、この時も「諸君が部下をつれて一万五千機堂々と揃った時、日本は本当に大丈夫だ。日本のために諸君全部に死んで貰わなくてはならぬ。裟婆気は一切捨て切って、いつでも死ぬ用意をしておけ。私も分隊長も皆諸君と一緒に突っ込んでゆくつもりである」と話を結んでいる。

一〇月一四日に始業式の日の司令の訓示が印刷物で廻ってきたが、その中に「只今限り私心を断ちこの際悠久二千年の大義に生き、大義に死することのできる自己を完成しなければならない」とうたっている。

この死の教育は、土浦だけではなくどの隊へ行っても行われた。筑波航空隊の練習機教程で分隊士立見中尉は、「貴様たちの肩に日本の命運がかかっている。敵の中に突入し立派に死ぬことのできる者だけあればよい。楽をしようと思う者はさっさと海軍を出てゆけ」と教えたし、分隊長小川大尉も「もし戦いに出てどうしてよいか処置に困った時は必ず突っ込んで死ね、死ぬのが忠義である。犬死にということはない。死ねば総てが解決される。決して迷うことなく死ぬ道を選べ」と教えた。こうした教育の中で実用機教程では分隊長山本大尉に「貴様らの命より飛行機一機の方が大切なんだ」とまで言われ、その意味するものを考えて、今の若い人は笑うかも知れないが、納得をしていた。そして基地航空隊へ赴任する頃、私は死について次のように考えていた。

「死を超越しなくても死ぬときがくれば死ぬ。また死を超越しなくても自爆もでき、体当たりもできる。死を超越しなくても立派な働きはできる。戦場に出て命は惜しいと思っても任務の前には決して命を惜しまぬに違いない。死にたくないことに変わりはない。しかし死ななければならない時がきたら受けとめるしかない」

日本が米国に追いつめられていたことはみんな知っていたし、またわれわれ以外に飛行機で戦う人間はいないし、志願して飛行機乗りになったのだから、これらの教えを素直にきくことができた。新聞もろくに読む暇もなく、午前三時半起こしで訓練する毎日では、戦争の意味など考える余裕は全くなく、生きて帰る日があろうとは夢にも思っていなかったし、特攻も運命として受け止めた。

神風特別攻撃隊敷島隊の関行男大尉以下五名が、マバラカット基地を出撃したのは昭和一九年一〇月二五日である。一〇時五〇分敵空母を発見して全機突入し命中をした。「必中なければ特攻なし」といわれる特別攻撃隊のはじまりである。当時マバラカットの二〇一空の零戦はわずかに三〇機である。搭乗員の錬度は低い。柳田邦男の『零戦燃ゆ』にあるように、零戦はすでにグラマンF6Fに歯が立たず、出ると負けの連続であった。

こういう状況の中で司令長官大西瀧次郎中将は「若い者を美しく死なしめる、これは大慈悲というものですよ」と特攻を決断する。特攻慈悲論である。マバラカット基地の状況の下での特攻は統率の外道とは必ずしもいえない。撤退するならともかく、戦うとすればそれ以外に方法はなかったであろうし、搭乗員もそれを熱望したであろうことは心情として素直に肯うことができる。

問題はそのあとである。敷島隊が突入し成功するや全海軍航空隊、いや全海軍のみでなく、陸軍の作戦も特攻一色に染まってしまったのである。

日本の軍事力とアメリカの軍事力を全体で比較すれば、日本の軍事力全体がマバラカットの二〇一空のようなものだとみられないこともないが、特攻は例外的に認めらるべきもので、制度としての特攻はやはり統率の外道で許されるべきことではない。しかし「飛行機の方が貴様らの命よりも大切なのだ」「兵隊は一銭五厘（当時の葉書の値段）でいくらでも集まる」「陛下の御馬前に死することこそ最大の名誉」という当時の軍部の死の思想の下では、もはや引き返す術もなく、暴走一途をたどった。「桜花」という言語に絶する非人間的兵器が開発され、特攻に起用されることになる。

私は博多海軍航空隊で教官をしていた時、一五名の十四期飛行科予備学生（学徒出陣組）を桜花特攻隊員として神の池海軍航空隊へ送った（幸い突入者は一人もなかった）。当時の博多は空襲もなく平穏で、マバラカットのような切迫感はなかった。博多では志願制度をとったという記憶はない。一五名だけが繰り上げ卒業、転勤という形だったからである。送別会では平静であった隊員も全員見送りのときは目にいっぱい泪をためていた。

凍てし門出るや神鶯よよと泣く

よよと泣きくずれたのが偽りのない

感情であろう。特攻隊を考えるとき、今もあのシーンが目に焼きついて離れることがない。

博多空から元山航空隊へ転勤したのは昭和二〇年三月二日である。着任したときすでに第一・七生特別攻撃隊が編成されていた。筑波零戦の同期の田中久士が編入されていた。着任後すぐ第二・七生特別攻撃隊の編成が行われ、博多からいっしょに着任した成田和孝が編入された。

特攻隊は志願という形式をとっているので事前に搭乗員に熱望かどうかを紙に書いて提出させる。日本は昔も今も空気によって支配される国である。熱望と書いて提出するしかない航空隊の空気の中では、それ以外の答えは一人も出ることはない。全員熱望である。私も「熱望　海軍少尉後藤弘」という紙を提出した。

特攻隊の選考はどういうわけか真夜中に行われた。従兵が真夜中にコツコツとドアをノックして司令室へ来るように伝える。博多と同様、平穏な元山では特攻隊に選ばれた者は翌朝何ともいいようのない作り笑いをするのが常で、思わず目をそらしてしまう。死の教育を受け死の覚悟はしていても、マバラカットのような切迫感のない元山では、心の動揺はかくし切れないのである。このことは予備士官だけではなく、兵学校出の士官もほとんど同じであった。そして元気がなくなる。

飛行場では、特攻隊と制空隊の二つの訓練が行われるが、一目みただけで特攻隊がどちらかがわかる。制空隊は溌剌として元気いっぱいだが、特攻隊は沈滞して士気が上がらない。特攻隊に指名される前は鬼分隊士だった者も、特攻隊員になると仏に変身してしまう。いっしょに突入する部下を殴ることができなくなる。

私は成田が鹿屋へ進出する前日「特別攻撃隊指導指針」という文書を六時間かけて書き写してやったことがあるが、できたので手渡そうとしたら、ベッドの上で成田は声を殺してむせび泣いていた。はっとして外へ出たが、私は成田を慰めてやることも、力づけてやることもできない。この成田も進出するときは莞爾として微笑んで離陸し突入している。

『雲ながるる果てに』の中に神風特別攻撃隊二一〇部隊で突入した福知貴、伊熊二郎と及川肇、遠山善雄の四人が詠んだ川柳が収録されている。

・生きるのは良いものと気が付く三日間
・まだ生きているかと友が訪れる
・することのない今日、明日の死が決まり
・雨降って今日一日を生きのびる
・十三期特攻専門士官なり

この川柳は切ない。グサリと胸につきささる。

・ジャズ恋し早く平和がくれば良い
・童貞のままで行ったか損な奴

何のために死んだのか。

戦後四八年、幸運にも私は生きながらえた。二五歳前後で死んだ同期生に比べて、私の人生は何と倖せであったであろう。人間は生まれたからには必ず死ぬ運命にあるが、二五歳で死ぬのと、七五歳とでは内容に天地の差がある。亡くなった同期生のほとんどは結婚をしていないし、もちろん子供もいない。家庭生活を経験することなく、持てる多彩な才能を生かし切ることなく、その生を戦争という暴力で絶たれたのである。悠久の大義に生きるという美名の下に、世界戦史に類のない特攻作戦も大西中将の意図どおりにはならず、日本は負けた。彼らの死は果たして何だったのであろうか。結論を先にいうと犬死にである。日本の戦後の高度成長は、戦いに勝った故ではなく戦いに敗れた故の成長であった。日本は戦いに敗れて亡びることもなく繁栄をしたのである。われわれの同期生は敗れるためではなく、勝つために大空に散り体当たりを敢行したのである。後解釈だが、特攻隊は二〇一空で終止符をうつべきであった。あとの特攻は、いたずらに犬死にをふやしただけである。

論理的にはそうだが、心情的に私は同期生の死を犬死にであるとつき離すことは断じてできない。生き残ったわれわれは、われわれの後輩が再び死の哲学のもとに亡き同期生と同じような道をたどることのない平和な世界をつくることによって、同期生の死は生きるのである。反戦平和の運動である。例えそれが蟷螂の斧であろうと、続けなければならない。平和憲法を守り、武器生産、武器輸出に反対し、核の廃絶運動等を行うことが、生き残ったわれわれの亡き同期生への義務であると考えている。

ごとう・ひろし　一九一九年生まれ。一九四三年九月、十三期飛行科予備学生として土浦海軍航空隊へ入隊。一九四五年八月復員。現在、社団法人日本能率協会監事。

◇

○われらまた老いて

神津　直次

（わだつみ会編『学徒出陣』岩波書店　1993年8月発行　生き残ったわれら―3）

（1）学徒出陣から特攻隊へ

五〇年前の憲法には、兵役に服するのは臣民の義務だと書いてあった（旧憲法第二十条）。

この憲法にもとづく法律により、男子は満二〇歳になると兵隊にならねばならなかったが、専門学校以上に在学していれば、卒業まで待ってもらえる徴兵猶予制度があった。

平和な時なら、兵隊にする時期を学生たちに限り数年延ばしても、どうということもなかったのだ。

だが、戦時ともなると、同じ年齢の若者が、兵隊となり、前線に出て戦死してゆくのに、学生だけがその生活を続けてゆけるのは、大変な特典となっていた。

戦争が容易でない形勢になった一九四三年（昭和一八年）秋に、この制度が停止された。それは兵隊が足りなくなったからだが、国民の間の不公平を是正するという意味もあった。

徴兵猶予停止が発表された時、学生は思いのほか冷静だった。学業を中断して兵隊にゆくのは残念なことだが、世界中が戦争をしており、何千万という各国の若者が戦場にあるのだし、わが国もアメリカやイギリスと死闘しているのだ。しかも、小・中学校時代の同級生たちが銃を持って戦っているのに、自分だけは兵隊にゆかないということは許されない。

かくて何万という学生が兵隊になった。これを世に学徒出陣と呼んだ。わたしもその一員として舞鶴海兵団に入った。

学徒出陣から一〇ヵ月、一九四四年（昭和一九年）一〇月のことだった。突然、予備学生となって訓練中のわたしたちに「特殊兵器ができたので、搭乗員を募集する。その兵器は性能上特に危険を伴うので、諸君のような元気溌剌かつ攻撃精神旺盛な者が適任である」との話があった。

われわれは、どうせ間もなく戦場に赴くのだから、少しでも良い兵器で戦いたいと、大半の者がこれを志願した。危険率の多少など眼中になかった。まだ神風特攻がはじまる前なので、そんな無茶な戦術があるとは思っていなかった。

多数の応募者の中から選抜されたわたしたちが、大村湾の魚雷艇訓練所に着いてから、神風特攻の実施とその戦果が新聞に発表された。われわれの乗る兵器はどんなものか、まだ教えてもらえなかったが、これで想像がついた。成功しても失敗しても、いずれにせよ、生きては帰れない兵器に違いない。

やがて、瀬戸内海の光基地に着いて、巨大な魚雷と出会った。お前たちはこの「回天」という名の魚雷に乗るのだと言われた。基地にはすでに多数の搭乗員がいて、一部は搭乗訓練に励んでいたが、兵器の生産が間に合わず、多くの隊員が搭乗の順を待っていた。

隊員たちは、国のために敵艦ともども爆死することを、おのれの使命として喜んで受け入れているように見えた。それは新参者にとって驚異であった。しかし、戦況が日に日に悪化し絶望状態になった時、わたしも、同胞を守るために命を投げ出そうと思うようになっていた。

訓練を終了した者はつぎつぎに出撃してゆき、再びは帰ってこなかった。帰らざる搭乗員の出身は、海兵・海機出の士官、一九四三年（昭和一八年）九月に大学を卒業し予備士官となった先輩、同期の学徒出陣組ながら先着していた予備士官、志願兵から昇進した下士官、予科練出身の下士官と、まちまちだった。わが国の若者全体の縮図とも言えた。

われわれの番はなかなかまわってこなかった。ようやく訓練が始まり、仲間の一部が出撃戦死したところで、戦争は終わった。戦いに負けたのだ。

昨日までは、誰が戦死しても殉職しても、涙は流れなかった。それは次の日の自分の運命なのだから。多少の時間の違いはあっても、この戦いで死ぬことに変わりはない。それが、突然の降伏で生者と死者の差は無限のものとなってしまった。

君たちの帰りを待っておられるご家族の方がたに、何と申し上げればよいのか。生きているのが苦しいと思った。

（2）焼け跡と復興

故郷に帰る汽車の窓から見たものは、家という家は焼かれ、工場という工場は爆撃で破壊された、無残な祖国の姿だった。何もかも失ってしまった日本。間もなく占領軍が入ってきて、政府はその支配下におかれる。再び独立できる日はいつか。政治家たちや軍人どもは日本を何という姿にしてしまったのか。

この日本を再び繁栄させるのは、亡き友への、生き残ったわたしたちの義務だと考えた。その前に、まず飢えをしのがねばならなかった。金を稼ぎ、闇の食料を手に入れることから始めたわれわれだった。

勝利者米国は寛大だった。莫大な食料を援助してくれた。中には家畜の飼料らしき物もあったが、それでも飢えはしのげた。次は経済の復興だった。

勝利者の仲間割れが始まった。米国にとって日本は、ソ連の共産主義に対

抗する上での、貴重な存在になった。米国は日本を急速に復興させようと、旧支配層を利用しはじめた。

若者はそれに不満だったが、これが国力回復への近道と我慢した。どんなに苦しくても、日本を戦前の姿まで戻し、さらにもっと立派にしなければならないと思っていた。

「衣服足りて礼節を知る」と信じ、他のことはあとまわしにして、祖国の繁栄のためにと働いたわたしたちの姿は、外国人から見ると「エコノミックアニマル」だったろう。

戦争も戦後の疲弊も知らずに育った若者たちは、われわれの姿を見て「富こそ善だ」と思ってしまったようだ。いや、わたしたちの中にも手段を目的と取り違えてしまった者が多い。

あの戦争を引き起こす一役を担いながら、口を拭って、罪はすべて陸軍軍人にあり、自分は戦争に反対だったと称し、政界に復帰してきた政治家どもは、一片の道義心も持っていなかった。それを見習ったかれらの子分たちは、金と権力の亡者として、数かずの汚職事件の立役者となった。

金を手に入れるためには、法律に触れないかぎり、どんなあくどいことも、平気でやる。いや法に触れても見つからなければかまわない。金を使って権力を握り、その権力でさらに金を稼ぐ。そうでなければ他人の権力に媚びておこぼれをもらう。金のためには、弱者を踏みつけようが、傷つけようが、他人の足を引っ張ろうが、お構いなし。義理人情を口にするが、それは自分の身内や取り巻きに対するだけのもので、赤の他人はどうなってもよいのだ。

若くして死んでいった友人たち、とくに特攻で死んだ仲間は、同胞の幸せのためには、自分にとっていちばん大切な命さえ捨てて顧みなかった。そういう心やさしい人たちは、あの戦いですべて死に絶えてしまったのか。

こんな堕落した姿を見て、戦後のすべてを否定し、戦前の思想、制度が正しく、戦後に占領軍により歪曲された部分は、早急に取り除かなくてはならないと主張する一群が生じ、強力な地歩を占むるに至っている。富国強兵政策の下、国民が飢えに泣いたあの時代、国民に義務のみ課し、権利は無視された、あの昔のどこがよかったのか。

今かりそめの繁栄の国の前でわたしは呆然としている。どこがどう間違ってしまったのか。

（3）そして現在

人生は夢のように過ぎ去る。あの戦いに参じて生き残ったわれわれも、もはや老年の域に達し、日々友だちの訃報に接するこの頃である。戦いに敗れて故郷に帰ったあの日に、戦死した友に誓った祖国の復興とは何だったのか。少なくとも、日本をこんな姿にすることを約束したのではなかった。

夢中で働いているうちに、肝心の目標を見失っていたのだ。一部の者は気がついて、叫び声をあげたが、それは世の滔々たる騒音の中にかき消されてしまった。

このような日本にしてしまったのは、まさにわたしたちの責任である。若くして戦死した仲間に会わせる顔がない。ではどうしたらよいのか。古めかしい言葉だが、次代に期待するほかはない。

日本が戦争をして無残な負け方をしたこと、それは当時の政治家が、自分の国の目先の利益しか考えていなかったからであること、他国に対し道義にもとる数かずの悪行を重ねたためであること、また国民がその政治家に盲目的にしたがったり、お先棒を担いだりしたからであること。これらの真実を、政権を担う政治家は次の世代に伝えたくないと考えて、小・中・高校の教科書に国家統制を加え、事実を隠蔽しようと、永年努めてきた。

それは見事に成功して、世界中で日本の過去の姿を知らないのは日本人だけという、奇妙な現象が生じている。そんな教育で育った次代に、はたして期待できるのだろうか。

だが、人の寿命には限りがある。この日本を立て直すには、どうしても、未来を担う若者に期待するほかはないのだ。

若者に告げたい。教科書以外の書物を、とくにあの戦争に関する本を、広く読んで、先輩の思想や行動を知り、現在の直前の時代の歴史を知って、これからの自分たちの行動の指針を探りだしてほしい。あやまちを再び繰り返さないために。

こうづ・なおじ　一九二三年生まれ。一九四三年一二月、東京大学法学部在学中に現役兵として舞鶴海兵団入団。一九四四年一〇月、回天特攻隊員。一九四五年八月復学。元会社役員。

栃木県護国神社研修報告

評議員　及川　昌彦

平成27年度の当顕彰会全体委員会の第1回研修会として、3月7日(土)に、栃木県護国神社研修を実施した。同護国神社には、平成22年8月15日、9体目の「特攻勇士之像」が建立奉納された。その後の慰霊・顕彰の状況を把握するのも研修目的の一つである。この件については、今後とも、建立奉納後の各護国神社を巡拝して、その現状を報告していきたいと考えている。

栃木県護国神社は、明治5年、戊辰の役に殉じた旧宇都宮藩戦没者98柱の御霊をお祀りするため、招魂社として創建された。その後昭和15年に、皇紀2600年記念事業として、用地献納や多額の寄附金により、現在の地に造営し、遷座された。

宇都宮には、大東亜戦争中、インパール作戦に参加した第33師団や宇都宮陸軍飛行学校等があった。同飛行学校では、飛行機の基本操縦教育を行い、昭和18年10月からは、特別操縦見習士官の教育・訓練も行われた。

宇都宮駅西口からバスで約20分、作新学院前で下車すると、深い森に囲まれた神域の入口に、立派な鳥居が建っていた。鳥居から続く表参道を歩いて境内に入ると、多くの慰霊碑が建てられていた。栃木県東部ニューギニア会、独立歩兵第78大隊高陽19会鎮魂碑、第33師団第204聯隊戦没者慰霊塔、山砲第33聯隊第4中隊、宇都宮第14師団野砲第20聯隊、日本赤十字殉職救護員、満洲開拓青年義勇隊、憲兵之碑、白鹿丸遭難、忠霊塔等。この一帯は、慰霊の森のような神々しい雰囲気を醸し出している。特攻勇士之像は、立派な台座にしめ縄をした跡があり、両側に花も供えられていた。毎月初めに奉仕の方々が清掃と供花をしてくださるとのことである。

その後、史料館に移動。史料館には戊辰の役から大東亜戦争までの軍装品などが収蔵されている。この史料館は、平成14年に、英霊を顕彰し、遺徳を偲び、追慕する場として開館された。我々の見学中も、地元の子供たちが親に連れられて来ていた。英霊に対する感謝、崇敬の念は、現世代にも脈々と受け継がれていることを強く感じた。

その後、御社殿で拝礼し、護国会館で稲寿宮司夫人から当神社の現状について説明を受けた。当神社の宮司さんは、栃木県遺族会連合会の事務局長を兼ねており、遺族の高齢化により孫世代へ如何に継承していくかを模索中とのことである。この護国会館は、結婚式場等として有効活用されているとのことであり、研修当日も、音楽教室が賑やかに開催されていた。また、境内の広大な駐車場は、学校関係の研修に貸し出されていた。

境内の成熟した枝垂れ桜は見事で、満開の桜の下の賑わう境内を御覧になる英霊もさぞかしお喜びのことと思われる素晴らしい神社である。

参加者は、衣笠陽雄専務理事、水町博勝理事、全体委員会の河島慶明委員、同原島淳子及び及川昌彦評議員の5名であった。

【特攻勇士之像碑文】

私たちは決して忘れない
かつて太平洋戦争の末期　敵の圧倒的戦力を阻止しようと爆弾をかかえ　あるいは魚雷を抱いて敵艦等に体当たりを敢行した特攻隊員のことを　祖国の安泰を信じ　太平洋の陸に海に空に散華した特攻隊員は　全国で実に五千八百余柱　本県で九十四柱に及ぶ

このたび特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会寄贈の「特攻勇士の像」を多くの県民の浄財によってここに顕彰碑として建立することができた　特攻隊員の崇高な美挙がこの碑によって永遠に語り継がれることを願うものである

平成二十二年八月十五日

栃木県特攻慰霊顕彰の会

・場　所　栃木県宇都宮市陽西町1－37
・電　話　028－622－3480
・史料館　開館時間：9時～17時
・交　通　JR宇都宮駅西口からバス「作新学院前」下車
・ホームページ　http://www.gokoku.jp/index.html

世田谷山観音寺
特攻平和観音月例法要
（毎月18日14時より執行）

平成27年1月18日(日)月例法要

会員　倉形　寛

平成27年最初の月例法要に参列した。年初めであり、また、当日は日曜日でもあったため、多くの会員及び会員以外の方が参列するものと期待していたが、法要参列者25名、直会参加者18名という状況で、半数以上は当会会員以外の方々であった。当会会員の参加がもう少し多くならないものかとの感は否めず、若干寂しい思いがした。

今回は、御住職の太田恵淳師が法要及び直会の進行等全てを担当された。

直会は、従来とは些か趣が異なり、御住職の法話等はなく、また、直会の場における希望者の発表等もなく、その機会もなかったので、自由に懇談する形となり、必然的に幾つかのグループが形成され、「分科会」的な様相となった。したがって、小グループ毎に話の内容の差、つまり、同じ特攻に関する話でも、その内容に濃淡の差が生じたものと認識している。

直会が、ある意味で参列者同士で知識を共有する機会、言わば「勉強会」としての機能も兼ね備えるものであるならば、直会の進行の「在り方」について、従来どおりの形式が良いのか、今回のような「分科会」的自由懇談の形式が良いのか、一考を要すると思われる。

また、常々感じていることであるが、法要に関わる管理事項（点燈、焼香の準備、お経「特攻平和観音経」等印刷物の配布、椅子の補充、空調等の調整等）について、少なくとも会員は率先、自発的に実施すべきものと思料する。

なお、今回の直会への初参加者は3名、当顕彰会への即日入会者は1名であった。

特攻観音堂と特攻平和観音像（陸・海軍二体）

世田谷山観音寺　特攻観音堂

平成27年2月18日(土)月例法要

会員　原　知崇

今月の世田谷山観音寺・特攻観音堂における特攻平和観音月例法要は、冷たい雨がそぼ降る中で執り行われましたが、早くから多くの方々が参集されました。

今回私は、神雷部隊について勉強されている大学生の方とご一緒致しました。その方は、文字での勉強に止まらず、これまでに神ノ池や鹿屋にも出掛けて行って見学して来られたそうで、最近では入間の修武台記念館にも、復元された「桜花」を見学するために足を運ばれたそうですが、世田谷山観音寺の特攻平和観音については、ご存じなかったそうです。

「桜花」の機体について、また、特攻基地や戦跡について調べているのであれば、是非、もう一歩進んで、特攻観音堂に参拝し、特攻で散華された隊員の方々の諸霊にお経を捧げてみてはいかがだろうか、これまで過去の歴史として研究して来たことが、特攻平和観音経を読誦することによって立体的に感じられ、特攻隊員の心をより近くで見詰める契機になるのではないか、かつての自分を思い返しながらお誘いしたところ、慰霊について、それが自らがすべきことなのか、そうでないことなのかはまだ良く分からないけれども、興味あるものには積極的に参加してみようと思っているとの返事でしたので、それではとお連れしましたが、手渡された特攻平和観音経を熱心に目で追っておられるのが印象的でした。当日は、他にも学生の方や社会人の方で4名ほど、初めて観音堂に詣でる方がいらっしゃいました。

直会では、大穂先生から、ラバウルで「紙」を作ったエピソードを伺いました。多くの陸海軍部隊が派遣されていたラバウルでは、食料や生活物資が不足しており、上は軍司令官から下は兵隊に至るまで揃って鍬を振るい、食料の増産に取り組んでいた。やがて廁の紙が不足し、慣れぬ土地でアメーバ

赤痢などに罹患した将兵は、辛い思いをしていた。その紙を作るため、陸海軍将兵一致して、現地の材料を工夫した紙を作ることになり、やがてその第1号が完成した・・・。残念ながら、我が陸海軍の不仲を伝えるエピソードは数多くありますが、弱い者のために協同した現地将兵について、大変貴重な史料をお示しになりながらのお話に感銘を受けました。

平成27年3月18日(水)月例法要

専務理事　衣笠　陽雄

今月の月例法要参加者は、先月の反動か、法要8名、直会7名の少人数であった。

法要は、山主太田賢照大和尚が体調を崩されて入院中のため、住職の恵淳若和尚が導師を務められ、特攻観音堂内において、特攻平和観音像を前に読経をされる中、全員が拝礼して特攻隊員の御霊に慰霊の誠を捧げた。

最後に参列者全員で読誦する「特攻平和観音経」は、先代の太田睦賢大和尚の作であるが、特攻隊員の挺身殉国の至情・勲績が短い文言の中に余すところなく表現され、毎回読誦する度に感銘を受ける。当顕彰会の特攻隊戦没者の慰霊・顕彰活動のバイブルと言っても過言ではない。

読経後、本坊に場を移し、恵淳和尚の司会で直会が行われた。この直会は当会会員にとって、和尚さんから有益な法話を承る場であるとともに、会員以外の一般の人達からも特攻に関する話を伺える貴重な場となっている。また、お酒を飲みながら気楽な気持ちで伺えるのもいいことである。

特に発言もなかったので、最初に私から当顕彰会の現状と問題点について簡単に説明をした。その後、歴史学者と言われる方から問題提起があった。それは「終戦時市ヶ谷台で自決した将官等の人達が特攻隊員と同列に祀られていると、ある資料にあったがどうなのか」との疑問があった。これについて、当会会員から一斉に、そのような人達は特攻隊員として祀ってはいないとの声が上がった。特攻隊の定義は決まっている、その資料を見せてほしい等の反論があった。我々としては全く理解できないことであったが、色々話を聞くと、彼も我々と同意見であること、資料は後ほど見せるとのことで落着した。

自決（自死）も特攻死というのは、余りの飛躍であるが、特攻隊の定義については、未だに解決できない問題があることも事実である。私は数年前、大阪護国神社の特攻勇士之像慰霊祭に参列した時、終戦時、満洲の国境警備の任に就いていた部隊の生き残りの人の話を聞いた。ソ連軍戦車による越境攻撃に対し、対応の手段がなく、しかもこれを阻止しなければ、後方の民間人が蹂躙されるという状況の中で、勇躍爆薬を担いで戦車の下に潜り込み、手榴弾を起爆させ、爆薬を誘爆させて戦車を撃破したという。この人達は正に特攻であり、特攻勇士として祀ってほしいと、戦友達は戦後ずっと言い続けてきたそうだが、特攻隊員名簿にないとの理由で却下されてきた。しかし現宮司がこの問題を取り上げ、生き残りの戦友から事実関係を把握し、特攻と同等の働きと認め、特攻勇士之像に新たに合祠をしたとの話を伺った。

私は、特攻顕彰会会員として戸惑いを覚えた。そうなると、問題は無限に拡大していく恐れがあるからである。終戦直前には多くの各種特攻兵器による特別攻撃が行われたが、我が特攻顕彰会は、当会が発行した『特別攻撃隊全史』の特攻戦死者名簿に登載されている隊員を慰霊・顕彰の対象としている。その特攻戦死者は、その行動が計画的であり、命令が発出され、出撃が確認され、特攻戦死後2階級特進した隊員なのである。しかし、前述の大阪護国神社での事例は、正に特攻死そのものである。そうなると、海軍のように船舶での出撃は理解されやすいが、陸戦特に終戦間際の作戦では、特攻と見なされる行動が多々発生していると思われる。玉砕した離島等では、その証言者や記録が無い。そういう状況を考えると、『特別攻撃隊全史』に記載の無い戦死者は、全て特攻死ではないとの見方は変えなければならないだろう。しかし、今からではその事実の発掘もほぼ不可能である。私的には、今からその問題を蒸し返すより我々の慰霊・顕彰の対象は、その行動が明確になっている―全史に記載されている―特攻戦没者を対象とするが、同時に細かな記録は無いが同様な戦没者も数多く存在したという事実に対して、同様な慰霊・顕彰を行わなければならないと思うのである。

その後参加者から発言があった。

元理事の廣嶋文武氏から、太田賢照山主の米寿に際しての当顕彰会からの感謝状贈呈へのお礼、麻生元総理に対する特攻平和観音年次法要参加についての4回目のお願い、下北沢文化遺産に関する紹介があった。

今回の直会は、参加者が少数ではあったが、議論が白熱化し、有意義な直会であったと思う。

特攻平和観音経

恭しく伏して惟んみるに天地開闢以来この世に生を享けしもの幾十百千万億兆なるを知らず。

その間同種相集い同族相結んで国をなし互いに境を劃し、相互反目反噬してその国土の拡延を図り争奪して止まざること百千万劫なり。

就中、中世以降、西欧の諸列強は善良盲昧の後進諸国を併呑し、もろもろの種族を圧伏して植民の苦を与え、その野望の楽を取りぬ。世界の旧秩序即わち是れなり。

我が邦は、古来平和を以て八紘為宇の大理想となし、万邦融合の大理念を掲ぐること、ここに三千年、昭和の聖代に至り、世界に一大新秩序を齎らさんことを庶幾し遂に曠古の大戦となる。

一億同心。打ちてし止まんの豪気蕩々、挙国戦務を務むるも、奈何せん、彼我の戦力隔絶し、戦勢日に非にして、大事将に去らんとす。

慈に忠勇無双の紅顔の烈士、自奮自励、九死に一生を期せず、特攻以て敵機、敵艦船を求めてこれを屠り敵陣営の膝を奪う。その挙の壮烈にして、その果の偉大なる、全世界の瞠目するところなりき。然りといえども、遂に惨絶の敗戦に会す。我が邦無前の苦艱、ああやんぬる哉。

特攻烈士の挺身殉国の衷情を忖度すれば、人皆言辞を嚥み、熱涙胸宇に充つ。

それ人身は享け難く、その生を終るや難し。前漢の大史公司馬遷にこれを聞く「人固より一死あり。死或は泰山よりも重く、或は鴻毛よりも軽し。これを用うるに趣くところ異なるなり」と。

特攻勇士の諸霊は正に忠烈の亀鑑なり。諸霊が父母の恩愛を断ち、大忠、大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比なる境涯に相到せんか誰か万斛の涙なきを得んや。

老いも若きも泣き
男も女も哭き
草も木も、馬も羊も涙せん
玉も礫も悉く悲しまん
天地万象凡て慟きて止まざらん

唯、諸霊を慰め得るもの一つあり宇内に無慮一百三十有余の独立国家の新秩序の出現これなり。

真に世紀の偉業。この赫然たるに匹儔するもの果たして他にあらんや。

これ正に諸霊の志の顕現なり。諸霊の血の発露なり。諸霊や、大仁にして大徳、大勇にして大善なり。故に諸士の霊徳や無量なり。諸士の光顔や巍々たり。諸士の威神や無極なり。

その威徳は日月と耀を争い、その勲績は末代永世に亘りて宇内に広宣流布せられんこと豈疑を容るるの余地あらんや。

嗚呼尊い哉、嗚呼仰がん哉、長存不滅の光

南無特攻平和観世音菩薩
南無特攻平和観世音菩薩
南無特攻平和観世音菩薩

「英霊を偲ぶ心の旅」に参加して③

会員　山口　宗敏

平成26年10月26日午前10時、羽田より鹿児島空港着、バスで旧歩兵第23聯隊本部跡の陸自都城駐屯地「郷土館」を見学の後、陸軍墓地「都城疾風特攻振武隊」の慰霊碑を訪れた。

「都城わりしべ」にて昼食後、「鹿屋航空基地史料館」を見学。近年「永遠の0（ゼロ）」の主人公が出撃した場所として知られている。続いて「鹿屋特攻隊戦没者慰霊塔」「桜花の慰霊碑」にお詣りする。この日は飛行機雲が幾筋も幾筋も走り、淡く白い航跡を残していく。それはまるで翔け昇って消えていった英霊たちの魂のようであった。秋の日のつるべ落としの中で、青く輝いていた空も忽ち光を失い、薄暗くなっていた。街灯のない一本道をヘッドライトだけを頼りに車は走り続け、夜の7時過ぎ「串良海軍特攻隊出撃戦没者慰霊塔」に到着。串良基地跡の一部を公園として整備し、その一角に小高い丘が造られている。丘の頂上には鳩を戴いた慰霊塔が夜目にも白い姿をくっきりと浮かび上がらせていた。この慰霊塔手前の橋の上で慰霊塔に向かって手を打つと、塔の上の白鳩が鳴くという。夜の公園は我々以外には誰もいない。

所々に配置されたライトが暗い園内をオレンジ色に照らしているのも逆に辺りの寂しさを浮かび上がらせている。朝からかなりの強行軍で疲れていたが、真っ暗な足元を用心深く確かめながらゆっくりと慰霊塔へと進んで行く。幾つもの小さな慰霊塔が並んでいたが、暗くて殆ど読み取れなかった。やがて慰霊塔の前に到着して全員で献花し、慰霊顕彰の祈りを捧げる。すると、慰霊塔の左右に1本ずつある国旗掲揚用のポールのうち、左側の1本が風もないのにゆらゆらと揺れ始めた。周りに何の動きもなく、周囲の木々の葉を揺らす風もない静寂の中で、唯1本のポールが約20分程揺れていた。慰霊塔の左側には特攻隊員の名簿が刻まれていたので、きっと英霊たちが喜んで迎えて下さったのだと、全員が感じた。皆がお祈りを済ませると、「有り難う、もう遅いから皆帰りなよ」と言わんばかりに、ピタリと揺れが止んだ。一人か二人だけがこの経験を話しても、錯覚だの気のせいだのと、相手にされなかっただろうが、24の瞳ならぬ20の瞳でハッキリと見たのだから、間違いない怪奇現象であった。同行者の一人、加納孝子さんは、これを次のように詠んだ。

「特攻を串良の塔に詣でれば
　揺れるポールに英霊を観ず」

「後を頼む」、「私に逢いたくなったら靖國神社に来なさい」と言って翼を振って飛び立った彼らに対し、我々戦後の日本人は何も（と言っても過言ではない）応えていない。多くの日本人が彼らのことを忘れ去り、何事もなかったかのように平和を享受し、安寧を貪り、彼らへの感謝も慰霊の思いもなく、自分たちのためだけに生きているのを英霊はどのような思いで見守ってきたのだろうか。ただただ申し訳なく忸怩たる思いである。

2日目、10月21日、「万世特攻平和祈念館」を見学の後、「知覧特攻平和会館」へ。同敷地内の油倉庫、正門跡、給水塔、消火槽、着陸訓練装置、三角兵舎などをつぶさに見て回る。

沖縄戦での陸軍特攻隊の殆どが知覧基地から出撃したとなっているが、実はその中の多くは、今や何の記録もない万世基地からの出撃である。このままでは万世から出撃した隊員たちは永遠に忘れ去られてしまうことを案じ、元特攻隊員（出撃を数日後に控えて終戦）故苗村七郎氏の大変な努力によって「万世特攻平和祈念館」が建設された。

続いて見事に復元した鳥濱トメさんで有名な富屋食堂「ホタル館」を訪れた。ここには若い人が一杯で、トメさんの温かい想いがひしひしと伝わって来た。

次に「指宿海軍航空基地哀悼の碑」と鹿児島の歴史を凝縮した「維新ふるさと館」を見学し、2日目を終えた。「花瀬望比公園」（比島戦没者慰霊碑）を訪ねる。この海岸は、イソギンチャクが殻の中から五色の花を咲かせている群落があったことから「花瀬」の名前が生まれた由。同公園の慰霊碑は、「死生の扉」「想比の碑」「安らぎの碑」「万鐘楼」などがあり、これらが整備されて、元々は単に「花瀬公園」であったものを「花瀬望比公園」と改称されたとのことであり、ここから1900km先のフィリピンに出征され、戦死された47万6千余柱の英霊たちの安穏を祈念して命名されたものである。

最後は、JR本土最南端駅の「四大山駅」、「池田湖」を巡り、大久保利通、西郷隆盛、東郷平八郎の墓を詣でて帰途についた。特攻隊員たちの凛とした姿、祖国を想う熱烈な遺書、家族に宛てた愛情溢れる最後の手紙、魂の雄叫びのような血書等々、どれも涙なくして語ることはできない。ただただ英霊たちの鎮魂を祈るばかりの3日間の短い旅であった。

最後に某記念館で入手した昭和20年4月、鹿児島「第一国分基地」から出撃した4名の特攻隊員が死の僅か3日前に遺したという川柳を付記する。

・あと三日、酔って泣く者・笑う者
・能筆は遺書の代筆よく流行る
・明日死ぬと　覚悟の上で飯を食い
・死んでいる友に母死すの便りあり
・雨降って今日一日を生き延びる
・宿の窓、今日は静かに雨が降り
・明日の空、案じて夜の窓を閉め
・人形へ　彼女に云えぬことを云い
・犬に芸　教へおおせて戦友は行き
・特攻へ　新聞記者の美辞麗句
・俺の顔　青い色かと戦友が聞き
・勝敗は　我らの知ったことでなし
・あはて者　小便したいままで行き
・童貞のままで行ったか損な奴
・無精者　死に際までも垢だらけ
・諸共と思えばいとしこの虱
・ジャズ恋し　早く平和が来れば良い
・明日の晩　化けて出るぞと友脅し
・明日征くと決まった戦友の寝顔見る
・神様と　思えば可笑しいこの笑顔
・体当たりさぞ痛かろうと戦友は征き
・痛かろう　いや痛くないと議論する
・良い天気　今日は特攻機何機出る
・出撃の時間来るまでヘボ将棋

《読者の声①》真正な日本人の懐中メモ（続）

会員　石田　一（陸士57期）

○日本の一番偉大で尊い渾沌が、即ち皇室、天皇である。日本を解するには、渾沌が大事。日本の一切はすべて渾沌の皇室、天皇より発現する。

○日本人というのは、言わば一つの大家族である。そしてその家長が天皇なのである。家には家風や不文律の掟、慣習がある。

○天皇は祈る君主、祭祀王でおわす。戦後憲法は、皇室祭祀を天皇家の私的祭祀とした。国民の天皇観を歪めている。

○皇室と「ヨン様」の区別がつかない。嘆かわしいことである。戦後、急速に皇室と国民の距離が縮まったことで、皇室に対し距離感を喪失した非礼を働くようになってしまったのではないか。

○国体を守るのは軍隊であり、政体を守るのは警察である。日本軍の建軍の本義は、皇室を中心とする日本の歴史、文化、伝統を守ること。

○日本神話に謂う高天原には、賭博台もインチキ金融工学も存在せず、高天原における神々の生活が日本人の生活であり、真の人間の生活なのである。

○天皇は廃止することができないから制度ではない。神が制度でないのと同じ。

○皇室や日本文化は必ずしも全て合理的なものの上にあるのではなく、非合理なものを含めた上に成り立っている。非合理を排除していったら日本は日本でなくなる。

○日本歴史に記されたことは、事実の如何に関わらず真実である。真実は必ずしも史実と一致するとは限らない。

○大和魂に等しい精神の事実を身につけた外国人が日本に来て大和魂を感得する。日本人はそれを失っていて感じなくなっている。

○先人たちは万世一系を守ってきた。これまで皇位継承の危機が3回あったが、その3回とも、近親の女系でなく、たとえ遠縁であろうとも正真正銘の男系男子を天皇に擁立してきた。皇族は「皇統の担保」のため存在している。安定的な皇位継承のために、皇族の範囲を拡げ、宮家を増やす必要がある。

○日本精神保持のため、皇族（以前は貴族、華族にも）にはそれなりの規律、儀礼、非日常の戒律的生活が厳しく守られてある。

○天皇を失えば、日本は日本でなくなり、国民は国民でなくなる。国は解体してばらばらになり、国民は個性を失って精神的に荒廃し、人類に寄与すべき根元の力を失う。

○先進国、発展途上国を含め、世界のかなりの数の国の若者に対して、「あなたは国のために戦えますか」というアンケートを取ったところ、日本の若者の「はい」という答えのパーセンテージは最低だったという。多くの若い国民に「自己犠牲を払って国のために尽くす」気がないことを意味している。

○明治日本の時、進んだ欧米文化に触れた一行の中に、日本が遅れた要因は、偏に封建制の歴史が長過ぎたからだとして、「日本も、アメリカやフランスのように共和制にしなくてはならない」と言い出すものも出てきたという。更に彼らの中には、「日本が遅れているのは、世界に通用しない日本語にある。日本語をやめるべきだ」などと主張する人間も少なからずいたという。

○憲法第一条後段の「この地位は主権の存する国民の総意に基く」の部分はソ連が作成した。

○君主の存在と国民主権は両立しない。そんなことをすれば必ず君主の地位が危うくなる。

○国民主権の恐ろしい素顔とは、天皇の首をちょん切れという原理なのです。

○日本の学者、知識人の殆どが大東亜戦争中に、ルソー、マルクス、レーニ

ン、スターリンの信徒になっており、手の施しようがないほど汚染が進んでいた。

○合理主義を建前に、地質学、考古学で国史を説き始めて、建国の経緯、神話に触れずに飛鳥時代に入る歴史教科書、という巧妙な罠で小国民を教育した。

○このまま建国の歴史を書かない教科書で教育を続けていけば、将来、日本から日本人はいなくなる。

○靖國神社参拝を、国を割って議論する不思議な国、日本。

○領土を守るには、主権国家としての強い意志が必要。その担保には、軍事力が必要。国家を強く意識しないと、日本もチベットのように、中国によって「解放」される悲劇を味わわないとも限らない。

○国滅ぶ時、神、地に堕ち、婦、多言す。（中庸）

○軍事力（国防）を背景としない外交はあり得ない。

○戦後、日本は間違った道を歩み続けてきました。モノによって幸せになれると思い込み、自分の権利は徹底的に主張するが、義務はなるべく回避しようと歩いてきました。「誇りなんて食えるの」「国なんてないほうがいい」「国の行く末を考えるのは変わり者」との醜い心に悪ずれした日本人が列島を占めていた。

○昭和16年の日米開戦時に、アジア、アフリカの有色人種の国で独立国家だったのは、タイ、トルコ、エチオピア、日本であった。

○江戸の太平は日本を惰弱にせず、活力に満ちた人材を遺した。

○ただ存在するだけで磁石のような吸引力のある人物は、この西郷一族を以って日本列島から姿を消した。

○敗戦を終戦と言い換えて目を逸らし、何でもカネ、カネの戦後日本人に埋め難い断絶を感じた。こんな日本のために俺は30年も戦ってきたのか。清き直き日本人は本当に少なくなった。ますます質が悪くなってしまった（元陸軍少尉・小野田寛郎）。

○日本は縄文時代がとても長かったから、ここまでを入れると優に1万年を超える歴史がある国家なのである。

○日本人の覚醒、悟りは、文明の始まった1万数千年前から天武天皇の頃までに一貫性をもって続いていた。

○日本には1万年に亘る新石器時代、つまり縄文時代の歴史があり、そこで自然に浸った世界の意識が延々と育まれてきている。日本の縄文時代に既に日本全土に共通する統一的な文化の形成が見られた。

○皇位継承に不可欠の三種の神器は、すべてを調和させる叡智と慈悲に裏打ちされた正しい勇気を示している。

○中国、韓国、北朝鮮、日本国内の左翼リベラル勢力が、１９８０年代以降に、歴史問題で一貫して日本を攻撃してきた。その実質は、憲法改正阻止である。

○自分は日露戦争の頃にも日本に来て、多くの将軍たちに会った。彼らはそれぞれに風格があって非常に感じが良かった。ところが今度三、四十年振りに日本に来て、また大勢の将軍たちに会ってみると、前とは違った印象を受ける。日本の人種、民族だとは思えないほど違っている（マッカーサー元帥）。

○私がどうしても滅びてほしくない一つの民族がある。それは日本人だ。あれほど古い文明をそのまま今に伝えている民族はほかにない（大正末から昭和の初めにかけて駐日フランス大使を務めた詩人のポールクローデル）。

○伊勢神宮の保存、保護は国家の義務である。

○今求められている世界秩序、人心を調律する偉大な調律師、それは日本における天皇の御存在なり。

○明治９（１８７６）年頃、ドイツから東京医学校（後の東大医学部）に招かれたエルヴィン・ベルツが今日の自虐史観を彷彿とさせることを言っている。曰く「日本のインテリには、日本の過去を否定し、日本の古いものを恥じて日本を嫌うという意識のあることを経験し、ひどく人の気持ちを不快にする現象である」と。当時から今日に至るまで、日本のインテリに一貫して見られる姿である。

○昭和27年4月28日に日本が独立を回復したとき、憲法、教育基本法、国家の防衛を見直すべきであった。しかし、洗脳され、マインドコントロールされたままの70年を経過し、一層歪んでしまっている。

○古事記は日本にて著わされた世界、全人類の聖典である。

○西洋思想が、あらゆる方面に亘って二元対立抗争を原理とするのは、ギリシャ、ユダヤの二大源流から発して歴史を貫いてきたことによる。

○子供の機嫌を取るような教育は教育ではない。教育とは聖化の作業である。

《読者の声②》

「土と兵隊」南京攻略と父

会員　西山　邦夫

私の父、西山源次郎は、慶応大学を昭和6年に卒業し、帝国生命に勤めていた。

昭和12年9月28日、陸軍臨時教育召集のため、歩兵第15聯隊補充隊に入隊し、引き続き充員召集により、10月14日、歩兵第115聯隊付となった。

歩兵第115聯隊は、大陸における情勢に対処するため、宇都宮で特設師団として編成された第114師団（師団長末松中将）隷下として、同年10月18日、高崎で編成された部隊である。編成直後の10月29日に大阪港から出港し、11月10日には上海南方の杭州湾に敵前上陸し、南京攻略戦に参加した。歩兵第115聯隊の聯隊長は矢ケ崎中佐、中隊長は野間大尉であり、源次郎は少尉で小隊長であった。

源次郎は平成5年に没したが、南京攻略戦に参加した模様を、文書、手紙などにより残している。ここにその資料により、南京攻略戦における陸軍の一部隊の活動状況を紹介し、併せて中国が主張する南京大虐殺に関しても考察したいと思う。

○杭州湾から南京郊外までの進撃

次の文章は、源次郎が戦後郷土誌に寄せた手記であり、召集を受け、慌ただしく戦地に向かった様子がうかがわれる。

「泣くな嘆くな必ず帰る桐の小箱に錦着て、幹部候補生の監督斉藤少佐は毎日こう言わせたのである。軍人としての心構えをたたきこみ、何時戦場に送っても指揮官として立派な行動が取れるよう教育されたのである。昭和十二年、大動員があり、新治村（群馬県利根郡）で召集を受けた者八十名、私は高崎第百十五聯隊第三大隊第九中隊の小隊長を命ぜられ、部下七十名を配属された。十月二十日第三大隊千余名の大阪設営を命じられ先発することになり、戦地へ向かうことになった。軍服は一装用、兵器も新しく晒しでぐるぐると巻き、その白い銃は目に痛いほどであった。聯隊から高崎駅まで見送りに来た親兄弟や身内の者、友人知己で沿道は人で埋め尽くされた。四列縦隊で市中を行進する様は誠に威風堂々頼もしい限りであった。大阪で出航準備をし、戦闘訓練をすること一週間余、三十日には大阪港を出航、瀬戸内海を経て五島列島で停泊すること数日、艦船は合わせて百二十隻を超えた。停泊中明治節を祝いすばらしいご馳走が出た。酒は飲みたいし、ご馳走も食べたいが海は荒れる。部下兵の顔も覚えなくてはならず、船内では毎日三回の点呼、敵前上陸で部下を見失わないよう真剣であった。

十一月五日未明、柳川部隊長の率いるわが大部隊は杭州湾の北岸に成功裡に上陸した。上陸の際は抵抗を受けることなく、友軍機の音、前方で戦っている銃砲声を聞きながら揚陸後の作戦命令や食料と地図の配布を受けた。上陸地点で残敵掃討を命じられ、新倉鎮戸数数百戸余りの屋内捜索、付近農村での小戦闘、道路偵察等、泥道をさまよいながら筆舌では尽せぬ苦労をし、初めて敵の弾をくぐった体験、中国人民の貧しさ、電気もなく学校もなく、民家に入ってみると鍋釜もなく、衣類もない有様、突然日本軍に上陸されて持って逃げたとは思われない。」

源次郎が所持していた手帳に次の命令書の筆記がある。杭州湾上陸後、南京へ向かって進撃する際のものである。

邵家度における旅団命令（口述筆記）

「一　歩兵第十八旅団ハ各聯隊毎ニ一個小隊ノ護衛隊ヲ残置ス

一　西山小隊ハ邵家度ニ居ル聯隊本部ノ馬匹機関銃ノ馬匹小行李ヲ護衛シテ渡河点ニ至リ第百五十聯隊ノ護衛小隊ト合シテ新倉鎮ヲ経テ上陸地ニ行キ金山ニ至ッテ騎兵第五十八聯隊ノ大隊長ノ指揮ヲ受ケヨ

一　新倉鎮ニテ車両（旅団本部ノ車両）ト各大隊本部車両ヲ掌握シテ引率セヨ

一　第百五十聯隊ハ聯隊本部ト各大隊本部ヲ引率

一　重要書類金櫃ハ特ニ注意

一　通信班ニ会ッタナラバ馬ハ一切持ッテ行カナイ事ニナッタカラソノ馬ヲ一切残シ荷物ハ苦力牛等ヲ利用シテ運搬スルコト

一　器材ハ減ズルモ差支ヘナシ

右ノ命令ニヨリ邵家度ニ於イテ人馬ヲ集結シ、渡河点ニ至リ第百五十聯隊ノ歩兵砲小隊長伊藤少尉ニ会イ爾後ノ行動ノ打合セヲナシ渡河点ニ宿営ス」

以下行軍時の日記である。

「十一月十七日

黎明より馬匹七十余頭の渡河を開始し九時半渡河を終わる。百五十聯隊を先頭に百十五聯隊の順序にて出発、三官営を経て新倉鎮に至り宿営す。

十一月十八日

午前八時半新倉鎮を発し、午後五時金山衛郊外に達し、宿営す。（乙兵站部において人馬一日分の食料受領）

十一月十九日

金山衛城外に滞在す。

十一月二十日
悪道路のため車両輻輳し、前進不能にて百五十聯隊だけ出発し、百十五聯隊は滞在す。（食料二日分受領）
十一月二十一日
午前八時、金山衛を発し、午後四時揚樹浦着、宿営。
十一月二十二日
午前八時、出発、泥濘のため車両の運行不能のため荷物を半減し、金櫃護衛として第二、第三分隊を残置して亭林鎮に四時半着。
十一月二十三日
大小行李到着せざるため、援助す。
十一月二十四日
本日は松隠鎮に集結する予定なれど行李の一部到着せず。舟を徴発して運行を手伝う。
十一月二十五日
昨日出発した舟三隻未到着のところ、二隻は十一時着、他の一隻は弾薬をクリークに落し引き上げ出来ず。之が到着を待って滞在。午後三時第二、第三分隊到着、第五分隊は舟を護衛して松隠鎮に先発す。
十一月二十七日
金山着、上陸地点から道がよければ二日か三日で来られる距離と思うに、悪路のため二十日もかかり兵の苦労たるや何とも言いようもなく、泥んこで休憩する場所もなく立ちっ放し。体中どろどろで土のついていないのは目だけで、時々顔をなでると泥が手に一杯取れるほど、服は生地の見えるところなく、正に泥の兵隊であった。
十一月三十日から連日行軍し三十日嘉興、一日盛沢、二日霞沢、三日湖州、五日長興、六日湯度站、八日漂陽、九日華村、十日漂水と進んだ。この間、毎日十里余り歩いて、毎朝腰が上がらない。然し、銃声が聞こえると足が軽くなるのが不思議である。敵の遺棄死体も毎日何百を数え、飯を食うにも腐臭のない場所を見つけるのに一苦労した。南京が近くなったので毎日友軍機は飛び、攻略戦に早く参加するべく兵の士気が上がった。」
杭州湾上陸から南京攻略戦までの一線部隊の状況については、この作戦に下士官として従軍した火野葦平が著した『土と兵隊』に詳しい。この小説によれば、全般的な戦況が分からぬ中、兵隊たちが泥にまみれながらある時は道に迷い、ある時は部隊からはぐれるという混沌の中で戦闘していた。源次郎の手記にもあるが、火野葦平も小説の題名どおり泥土の中の状況を次のように表現している。
「泥濘の中に我々は何回となく引っくりかえった、私たちは路傍に軍馬が何頭も倒れているのを見た。それは既に息絶えているのもあったが、まだ生きている馬もあった。泥濘の中に身体を半ば埋め、或いは道路端に横倒しになったまま、我々が過ぎて行くのをじっと見送っていた。・・・・天の上を歩くように一歩行っては半歩滑り、ぬめり込んだ足はなかなか抜けない。・・・・滑って尻餅をつく、四つんばいになる、何人もクリークの中に落ち込んだ。」
源次郎も軍服の生地が見えないほど泥まみれであった。これに加えて支那兵の死骸の腐臭が激しく、食事もままならぬと言っている。源次郎の指揮する小隊は馬匹小行李の護衛を命じられており、葦平が描いた軍馬が泥濘の中に倒れる有様を見ていたに違いない。

○南京攻略戦

源次郎が所属し、高崎で編成された歩兵第１１５聯隊（高崎）は、第１５０聯隊（松本）と連携して南京城雨花門へ迫った。雨花門は南京を囲む城壁の南側にある門である。源次郎の陣中日記が一部残されており、それによれば12月12日に城内へ突入した。この戦いは激戦で、聯隊長矢ケ先大佐が負傷し、多数の兵が死傷した。幸い、西山小隊には死傷者はなかった。源次郎は行動中、作戦日誌とも言うべき記録と日記の2種の記録を付けていた。作戦日誌は作戦用の発信文、受信文とその時刻を記録する用紙に書かれており、受領した命令、戦闘記録、要図などが書かれている。日記は中国国内で印刷された小ノートで、表紙に練習帳と書かれている。現地の生徒たちが使っているものを利用したものであろう。作戦日誌、日記ともに多くは鉛筆で書かれており、判読が難しい部分が多く、かつ、記録が残っている期間も部分的である。しかし、南京攻略戦で経験した戦闘は、次のように日記に残されている。
（源次郎の手記から）
「十二月十一日、十二日
南京南方六里の抹稜関に到着した。南京城は火災を起こして紅く夜空を染め、砲声も聞こえる。抹稜関には、朝香宮様も宿営しておられ、前線を指揮しておられるから、西山隊も火災を出さぬよう注意を受けた。火事を出すと敵から砲撃されるからである。抹稜関を出発すると、野戦病院が仮設されており、多数の将兵が収容されていた。此処で矢ケ先聯隊長が負傷し、担架に乗って指揮していると聞いた。信澤少佐、沼田の内山大尉、林甫さんが戦死した。第三大隊だけで三百名が戦死傷

した。西山隊も早く第一線に行け、南京も間もなく落ちるだろうと言われ、猛進を続け、夜、野間中隊の下に入った。関口小隊は雨花門を攻撃中で、吾々のいた壕にも敵弾が盛んに飛んでくる。ここからクリークを渡ると、城壁まで三百米、城壁の高さは二十米あり、千二百発の砲弾で城壁を崩し、西山隊も十二日夜城壁をよじ登って突入した。残敵掃討をするが、城内は火災と銃声で声も聞こえない。夜中になって銃声も止み、民家で休息する。その時、兵が「隊長、ローソクに穴の空いたようなものがあった」と持って来た。マカロニであった。これは食えるんだ、早く茹でろ、兵にとって生まれて初めてのマカロニであった。腹を満たし、寝ようとしたところ、城壁上の警備に就けとの命令があり、そこで夜を明かした。

南京城は周囲十二里、汽車の線路もあり、その巨大さに驚くとともに、随分馬鹿げたものを作ったものと呆れる。

南京攻撃の最中、弾丸雨あられのなか、聯隊旗手に旗に弾を当てろと叫んだ者が居る。第百十五聯隊旗は陛下から下賜されたばかりなので、真新しい。激戦をした証拠がないので、この際ということか。聯隊旗手の小野里少尉の心中は如何に。」

次の文書は、源次郎が所属する第115聯隊と連携して南京攻撃に携わった松本第150聯隊の命令書である。この命令書の最初の部分に「第百十五聯隊の一部は当聯隊と混淆しつつ城内に進入せり」とあり、源次郎が所属する部隊が12日には南京城内に進入していることがわかる。南京は12月13日に陥落したとされており、この日以後は守りを固め、敵の逆襲に備えることを部隊に命じている。

歩兵第百五十聯隊命令

十二月十二日午後八時二十分　於南京城内東南角

一、敵は首都南京を放棄して北方に退却せるか如きも一部は尚至近距離に止りて我を攻撃するに汲々たり

歩兵第百十五聯隊の一部は当聯隊と混淆しつつ城内に進入せり

二、聯隊は既に奪取せる地歩を堅固に保持し夜を徹せんとす

三、会田少佐は城内第一線部隊を指揮し現在の線を確保し敵の逆襲に対し至厳をなすへし

一部を以て雨花門を守備せしむるをようす

四、内田大尉は城壁破壊口より右野口中尉は其の左側城壁占領部隊を指揮し城内の第一線と密に連絡し特に現在の線を確保すへし

特に両側城壁上よりする敵の逆襲を警戒するを要す

五、第三大隊長大塚少佐は其の指揮にある部隊及び第四中隊独立機関銃第五大隊の二小隊を指揮し城外を警備し城外の敵の逆襲を警戒し現在の線を確保すへし

六、第八中隊の二分隊は軍旗の直接護衛に任すへし

七、砲兵部隊は大逆襲に対しては友軍に危険なき地域に射撃し得る如く準備すへし

八、通信班は前任務を続行すへし

予は雨花門内第一線の直後に位置す

聯隊長　山本中佐

下達法　命令受領者を集め口達筆記せしむ

（歩兵第百五十聯隊『戦闘詳報』第六号より）

○南京事件

南京攻略戦に関して、戦後中国が宣伝する南京事件について源次郎が所属する部隊がどのような関わりがあったのか、触れてみたい。

いわゆる南京事件については、様々な考証が行われているが、源次郎のこの件に関する認識はどうなのか、日誌にも日記にもこの件については全く触れておらず、虐殺についてはその気配すらも窺うことができない。

事件の発生日時について、東京裁判では「日本軍が南京を占領した十二月十三日から六週間」という判決を出しており、日中両国の研究者もこれを事件の期間とするのが通例であるという。

第115聯隊は12月13日から雨花門周辺の残敵掃討と警備に当たっていたが、17日朝には、日誌に書かれているとおり、次の任務地（山東半島）に向かって出発している。即ち、南京に留まっていたのは僅かに4日間であった。この期間は、第150聯隊の作戦命令に見るように、占領地の確保、逆襲への備えに大童であり、他事に煩わされる余裕は無かったと推測される。事件の発生期間とされる6週間と比べれば、余りに短い南京滞在期間であった。

以下日記を引用する。源次郎が残した日誌は16日からノートが更新されており、南京滞在中の14日、15日の記録が残されていない。16、17日の日誌は次のように書かれている。

十二月十六日

午前五時半起床、朝食を済まし七時半整列を終わって二、三小隊より一小隊を編成し、雨花門の警備に付く。城

壁上に2個分隊、小銃分隊1個を残し警戒、展望哨を置く。

平田、上原上等兵を引率して城壁上を南門まで歩き、支那兵の弾薬、迫撃砲弾等夥しく、死体も数十ありたり。午後三時、大隊長殿の学課の為、本部迄帰る。大隊長の訓示（中隊長を中心とする団結、軍紀、風紀の厳粛）を終わって城門に至れば、活動写真撮影するとの事にて、小生も城壁上で万歳をする所に参加す。

午後十一時帰還命令あり、帰舎す。

十二月十七日

「午前九時半集合、正午南門を発する予定するに、十時には早くも出発、第四梯隊の第一分隊となり、加賀美砲兵少佐の指揮により高家荘（雨花門南方十数キロ余）付近に露営の目的を以って行軍す。二里半程歩いて雨花台南方地区にて昼食、それより大隊命令にて設営司令となり本部、機関銃、九、十一、十二中隊の設営係と下士官及び兵を率いて砲兵車輪、大小行李の間を縫い難行軍をして漸く目的地に達す。

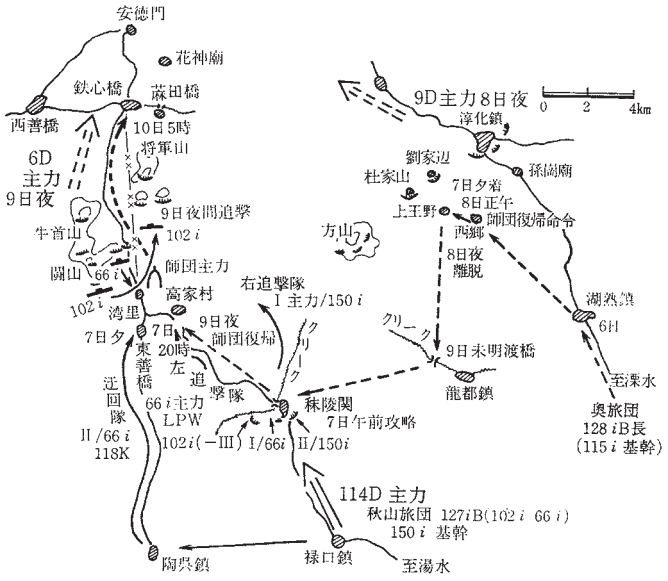
地形、地名等不明のため実に苦しい設営をした。それでも各隊にたいしたまごつきをさせずに済んだのは何よりであった。」

南京に滞在中は16日の日記にあるとおり、源次郎とその小隊は早朝から深夜まで城壁付近の警備を行っている。その間、大隊長の教育があり、部隊の団結と規律の維持を求められた。南京占領という快事に兵たちが気を緩ませることなく、「勝って兜の緒を締めよ」との意であろう。

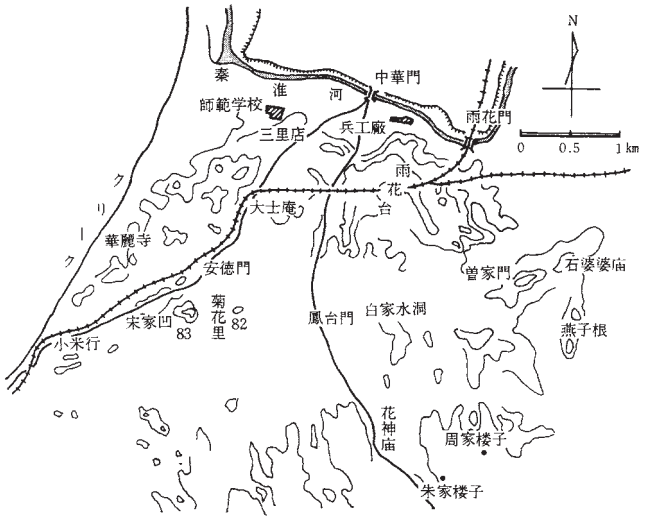
翌17日には、正午出発の予定を早めて10時に慌ただしく出発となった。部隊は前夜遅くまで警備を行っていたにもかかわらず、急な移動命令で直ちに出発できる態勢を確保していたのであり、このような迅速な行動ができるのは、高い士気と規律を維持していたからに違いない。即ち、源次郎の所属する第115聯隊だけがこのような高い士気を維持している状態にあったとは考えられない。南京攻略戦に参加した部隊は、中国が主張するような残虐な行為を行うような規律の乱れた状況には決してなかった。

後のことになるが、源次郎は、フィリピンで終戦を迎えた際、戦犯容疑を受けた。その時書いたものの中に、「部下が婦人関係の悪事をやらなければよいが。私はこのことについては口癖のように厳しく戒めていた。」という記述がある。後にフィリピンにおける戦犯容疑は晴れるのだが、源次郎は部下に対し倫理に関し平素から厳しい指導をしていたし、自分自身も厳しく身を律していたから、人倫に反することは行わなかったものと、息子として信じている。

第114師団の外周陣地突破経過要図



雨花台付近要図



注　1．日本軍は華麗寺ー菊花里ー鳳台門ー白家水洞ー曾家門付近以北の高台を広く雨花台と呼んだ。
　　地図上の雨花台は、雨花門南西に位置する東西500メートル、南北約1000メートルの台地をいう。
　　2．雨花門は一般城門と異なり、列車を通す隧道式城門である。

《現代若者の特攻観》（大学教育の場から）

神風特攻隊と回天を学んで

明治大学2年　山形　彩華

「編注・本資料は、明治大学で英語セミナーを担当している当顕彰会の石井千春評議員が教育の題材に特攻隊を取り上げ、授業後に学生に提出させた所見の中の一つである。今回取り上げた山形学生の所見は、我々顕彰会会員が若い次世代に特攻隊員の精神を伝承していくための参考となる良い資料であると思われるので、会員各位に紹介するものである。（専務理事衣笠）」

◇

今回、英語セミナーの授業で学んだ、「特別攻撃隊」及び「回天」について、もう一度考えたいと思う。

今まで戦争という一括りの言葉で、深くまで学ぶことはなかった。しかし今回、戦時中に生きた、特攻という戦術に身を投じた若者達に触れ、今までの戦争への考え方の甘さに気付かされた。（神風特攻隊・回天についての記述省略）

この日本の体当たり戦術又は自殺戦法である神風特攻、そして回天において「Diving Wind」の書籍や映像、先生のお話から私自身が思ったこと、考えさせられたことは多々ある。

先ず、日本とアメリカの考えの違いだ。書籍にもあっように、この神風特攻は、アメリカ軍に大きな影響を与えた。それは艦隊への攻撃もあるが、一番は、やはりアメリカ軍一人一人への精神的な影響であると思う。

アメリカは何としても生き残る。生き残るという希望は最後まで捨てないという意識が強い。これに対して日本は自己犠牲欲が強い。自分の犠牲で仲間が助かるかもしれない、家族が生き残れるかもしれない、日本が勝利するかもしれない。自分が最後まで生き残るという道を自らふさいでしまうのである。このことは現代の私達、同年代の若者達は容易に考えられないことであろう。戦争という、逃れたくても逃れられない状況に置かれてみないと分からないことだらけである。また、特攻隊として死んだ者は、普通に戦死した者達よりも多く階級が上がることを知った。階級で遺族に支払われるお金が変わるそうだ。そうなったら、いつ死ぬか分からない戦争において、普通の戦死を遂げるより、特攻隊として戦死した方が残された家族のためになると思ったら、特攻に志願する意味も少し分かった気がした。戦争で日本が勝利するとは限らない中で、どのような状況下においても、やはりお金はなくてはならないものであったのだろう。もともと家が貧しいかもしれない、名門の家柄であるかもしれない、もう両親がいないかもしれない、もちろん特攻隊を志願する者達すべてがこの理由で志願したわけではないと思う。どのような理由にせよ、必死の特攻隊を志願するには、沢山悩み、考えて決断したものであり、計り知れない信念があったと思う。

また、元回天搭乗員の方々のお話にあった、神風のような特攻より回天の特攻の方が成果を上げやすいというのは、今思うとうなずけるものである。やはり、もともと戦闘機での戦いの生還の確率は低いと言える中での特攻作戦で、特攻として敵艦に向かったところで、体当たりする前に撃ち落とされたりすることを考えると、回天での特攻の方が成功の確率は高いと思える。

また、先生が直接河崎さん達にお会いした時のお話を聞いて、昔のエリートは、家柄や学歴だけでなく、人間として、一個人として、人望がある人物なのではないかと思った。現代では、家柄、学歴で私達はエリートだと決めつけがちである。もちろんそこには、顔がかっこいい、身長が高いなどが含まれると、憧れの対象になりがちである。しかし、今回これらの特攻の真実や、やはり戦争の恐ろしさ、そして真の男像を学ぶことができたと思う。自分は女で、もし自分がその戦争中の時代を生きていたら何を思うだろう。戦争に駆り出された若者達は、今の私達と同じ世代で、もちろん特攻隊として出撃した若者達も同じだ。そんな中でもしかしたら、その戦争中、思いを寄せる相手がいたとして、その男性が兵隊として召集され、戦地に赴かざるを得ないとしたら、きっと複雑な思いだろうと思う。戦争に行くのは逃れられない義務としても、やはり、いつ戦死してしまうか分からない、もしかしたら戦死したとしても、誰にも発見されず、戦後その人が戦死していたと分かるかもしれない中で、戦争に行ってほしくないという思いだろう。そして、もしかしたら私自身が、夫、息子を戦地に送る母になっているかもしれない。きっとその時はその時で沢山辛い思いをするだろう。

戦争は、戦地にいる者達だけが国のため、家族のために戦っているのではない。国内で、戦争に使う武器や戦闘機などを作る工場の者達も、戦地の者達が食べるための食料を作る者達も、

そして国内で、戦地で必死の覚悟で戦っている兵士達の生還を願う国民達も、その時代を生きる子供達も皆戦っているのだと思う。もし自分が男であって徴兵されたとしたら、私はどこを志願するだろうか。特攻隊に志願するだろうか。実際、今の私には、やはり今でも特攻隊に志願する勇気はない。何としても生き抜きたいというのが正直な気持ちである。しかし、戦争という状況の下だとしたら、どうなっているか分からない。結局は、その状況にならないと分からないことだらけだ。しかし、今の私達はきっと、この戦争の中を生きてきた者達の声にならない叫びに耳を傾けるべきである。

　真の特攻隊員とは、特攻機に乗り、敵艦に体当たりした者達であると聞いた時、少し複雑な気持ちになったことを覚えている。河崎さんの言葉で、河崎さん自身も回天の搭乗員として、厳しい訓練を乗り越えてきた人物であって、特攻隊の一員であったことは確かであるにも拘わらず、河崎さんはこの言葉を残した。なぜだろうとその時思った。しかし、今ではその意味が分かる気がする。特攻機に乗り、敵艦に体当たりする時、きっと心が打ち砕かれる思いや、計り知れない死への恐怖、自らの手で自分の命を奪う、その当の本人しか分からない感情は、正に体当たりせんとする彼らにしか分からない。当の本人でない者が、その者達の思いを口にすることなどできない。

　そんな中で、特攻隊を残虐なものだ、残忍極まりない、などと批判する現代の人々の考え方は、私には分からない。その時代のことも考えて、特攻という言葉の真の奥底を見てほしいと思う。そして私達は、この戦争のことを、次の世代へと受け継いでいかなければならない。終戦から月日は流れ、今では戦争の生き残りの方達も高齢となってしまっている。そんな中で私達が受け継いでいかなければならない。また再び、恐ろしい戦争というものを起こさないためにも。

平成26年度事業報告

一　慰霊事業

1　第35回特攻隊合同慰霊祭

　平成26年3月30日靖國神社において斎行した。参列者は、遺族20名を始め来賓、戦友、一般会員等合計197名が参列して、英霊奉慰の誠を捧げた。昨年より26名の減少であったが、問題もなく整斉と実施された。

　慰霊祭終了後、靖國会館において、当顕彰会の状況説明及び懇親会を実施した。

2　第63回特攻平和観音年次法要

　平成26年9月23日の秋分の日に、世田谷山観音寺において、同寺と地元駒繋神社との神仏習合による年次法要が営まれた。当顕彰会は、全面的な協力を行った。当顕彰会関係の参列者は、来賓29名、遺族28名、会員等172名、総数229名であった。当日一般参加者が25名増加したため、最終的に昨年より25名の増加となった。

3　各地慰霊祭への参列等

ア　代表者派遣

（実施月日）	（慰霊祭等名）	（場　所）	（参列者）
4月5日	鹿屋特攻隊慰霊祭	鹿児島県鹿屋市	藤田副理事長
4月6日	都城特攻慰霊祭	宮崎県都城市	水町理事
4月7日	豫科練雄飛会慰霊祭	靖國神社	及川評議員
4月7日	徳之島慰霊祭	鹿児島県大島郡	新垣評議員
4月16日	出水特攻慰霊祭	鹿児島県出水市	高嶋評議員
4月20日	萬世特攻隊慰霊祭	鹿児島県南さつま市	秋山評議員
4月22日	靖國神社春季例大祭	靖國神社	衣笠専務理事
4月29日	秋田県特攻隊招魂祭	秋田県秋田市	高橋　暢
5月3日	知覧特攻隊慰霊祭	鹿児島県南九州市	衣笠専務理事
5月11日	特攻殉国の碑慰霊祭	長崎県川棚町	及川評議員

5月25日	特攻勇士之像慰霊祭	京都府東山市	金子事務局次長
5月25日	豫科練戦没者慰霊祭	茨城県阿見町	小倉理事
5月26日	特攻勇士之像慰霊祭	千葉県千葉市	衣笠専務理事
7月5日	大東亜慰霊協慰霊祭	靖國神社	杉山理事長
9月7日	高野山慰霊祭	和歌山県高野町	藤田副理事長
9月14日	市ヶ谷台慰霊祭	防衛省市ヶ谷駐屯地	水町理事
10月12日	原町飛行場関係慰霊祭	福島県南相馬市	衣笠専務理事
10月17日	千鳥ヶ淵墓苑秋季慰霊祭	千鳥ヶ淵戦没者墓苑	杉山理事長
10月18日	靖國神社秋季例大祭	靖國神社	杉山理事長
10月18日	明野忠魂塔慰霊祭	三重県伊勢市	衣笠専務理事
10月26日	特攻勇士之像慰霊祭	大阪護国神社	小倉理事
11月9日	回天大津島慰霊祭	山口県周南市大津島	金子事務局次長
11月9日	若潮会慰霊祭（最終）	靖國神社	衣笠専務理事

イ　供花送達等

（実施月日）	（慰霊祭等名）	（場　所）
4月3日	宮崎特攻基地慰霊祭	宮崎県宮崎市
5月7日	黒島特攻平和祈年祭	鹿児島県三島村
6月14日	義烈空挺隊慰霊祭	沖縄県糸満市摩文仁
10月15日	串良基地慰霊祭	鹿児島県鹿屋市
10月25日	神風特攻慰霊祭	フィリピン・マバラカット市

ウ　「特攻勇士之像」奉納除幕式

（実施月日）	（慰霊祭等名）	（参列者）
9月28日	大分県護國神社	藤田副理事長

二　「特攻勇士之像」建立事業

大分県護國神社に「特攻勇士之像」一体を建立し、奉納した。今回の建立奉納で、世田谷山観音寺への建立奉納分を含めて総計14体となった。

三　その他の事業

1　広報事業として機関誌・会報『特攻』第98号～第１０２号を発行し、会員、協力団体及び希望者等に頒布した。特に第１００号記念として創刊号から第99号までの記事総索引を付録として発行し、好評を博した。

2　出版事業では、平成20年度に刊行した『特別攻撃隊全史』及び『特別攻撃隊全史追補版』並びにＣＤ『あゝ特攻』等を少量ながら引き続き頒布した。

四　会員の動向

平成26年度の新規入会者は１０１名であり、死去等による退会者が２８４名あったため、会員数は差し引き１８３名の減となり、平成26年度末の会員数は１９１９名となり、当面の確保数２０００名を切った。平成26年度も前年に引き続き旧軍関係者の死去・高齢化による退会が多かったが、募集において、特に全体委員会メンバーのみで30名を入会させ、会員減少の歯止めに寄与した。今後とも手を抜くことなく募集事業を推進する。世代交代の末期に当たり、若手の会員募集を始め、生存者からの情報・資料収集、若手会員に対する世代交代のための諸施策を更に推進する。

平成２６年度正味財産増減計算書

平成２６年１月１日から平成２６年１２月３１日まで

(単位：円)

科　　目	２６年度決算	前年度決算	増　減	備　　考
Ⅰ　一般正味財産増減の部				
1　経常増減の部				
(1)　経常収益				
基本財産運用益	7,513,500	9,259,776	△ 1,746,276	利率低下
特定資産運用益	480,975	266,653	214,322	
受取会費	4,543,000	5,046,000	△ 503,000	
慰霊事業収益	2,380,000	2,563,000	△ 183,000	
出版事業収益	104,320	143,200	△ 38,880	
広報事業収益	3,800	8,000	△ 4,200	
受取寄付金	2,594,600	2,975,000	△ 380,400	
雑収益	4,524	100,000	△ 95,476	
経常収益計	17,624,719	20,361,629	△ 2,736,910	
(2)　経常費用				
慰霊事業負担金	531,854	574,553	△ 42,699	
像制作負担金	971,432	599,750	371,682	建立及び補修各１
発送等委託費	1,215,820	1,574,206	△ 358,386	
支払助成金	1,589,000	1,880,440	△ 291,440	
役員報酬	400,000	400,000	0	
給料手当	3,993,350	3,941,540	51,810	
福利厚生費	604,071	540,202	63,869	
旅費交通費	1,954,227	2,156,780	△ 202,553	
通信運搬費	469,523	415,771	53,752	
減価償却費	174,025	206,461	△ 32,436	
消耗品雑費	956,462	1,178,022	△ 221,560	
印刷製本費	2,771,710	2,000,428	771,282	
会議費	203,934	94,410	109,524	
光熱水料費	97,415	96,745	670	
賃借料	1,833,836	1,640,100	193,736	
諸謝金	80,000	101,920	△ 21,920	
雑支出	0	0	0	
退職資産繰入費用	296,000	155,000	141,000	
経常費用計	18,142,659	17,556,328	586,331	
評価損益等調整前経常増減額	△ 517,940	2,805,301	△ 3,323,241	
基本財産等評価益	5,304,780	1,556,362	3,748,418	時価評価益
基本財産等評価損	△ 1,296,475	△ 75,275	△ 1,221,200	時価評価損
当期経常増減額	3,490,365	4,286,388	△ 796,023	
2　経常外増減の部				
(1)　経常外収益				
指定正味財産からの振替	278,000,000	0	278,000,000	指定正味財産から
法人会計から公益へ振替	0	0	0	
経常外収益計	278,000,000	0	278,000,000	
(2)　経常外費用				
貯蔵品資産償却	0	0	0	
法人会計から公益へ振替	0	3,600,000	△ 3,600,000	
経常外費用計	0	3,600,000	△ 3,600,000	
当期経常外増減額	278,000,000	△ 3,600,000	281,600,000	
当期一般正味財産増減額	281,490,365	686,388	280,803,977	
一般正味財産期首残高	16,825,451	16,139,063	686,388	
一般正味財産期末残高	298,315,816	16,825,451	281,490,365	
Ⅱ　指定正味財産増減の部				
一般正味財産への振替	278,000,000	0	278,000,000	一般正味財産に
当期指定正味財産増減額	△ 278,000,000	3,600,000	△ 281,600,000	
指定正味財産期首残高	278,000,000	274,400,000	3,600,000	
指定正味財産期末残高	0	278,000,000	△ 278,000,000	
Ⅲ　正味財産期末残高	298,315,816	294,825,451	3,490,365	

内閣府認定等委員会立入検査

事務局長　羽渕　徹也

平成27年2月4日（水）に、当顕彰会が公益財団法人に移行後初めて内閣府認定等委員会の立入検査を受検しました。内閣府から検査官2名が来所し、午前10時から午後4時までの間、定款に基づいて公益事業が実施されているか、公益目的事業費を含み、収支決算が収支相償の基準を満たしているか等、細部にわたる検査が行われました。

当顕彰会からは、衣笠専務理事と羽渕事務局長の二人で対応しました。

結果として、大きな問題点等もなく終了することができましたが、ただ、現在行っている事業の関連で定款を変更すべきであるとの意見に基づき、3月の評議員会において、定款変更を付議することとなりました。

平成27年度第1回理事会及び定時評議員会実施報告等

事務局長　羽渕　徹也

一　平成27年度第1回理事会の実施

平成27年2月25日（水）、靖國神社遊就館内の当慰霊顕彰会事務室において、平成26年度事業報告及び決算報告並びに任期満了理事の再任、新任理事及び評議員の再任等並びに立入検査に関連する定款変更の決議等について審議され、全て原案どおり了承され、評議員会に付議することが決議された。

また、25年度から月1回程度会同を重ねている全体委員会の内容に関し、衣笠専務理事から報告が行われた。

二　平成27年度定時評議員会の実施

法律の規定に基づき、理事会の開催から2週間以上の間隔を置いた平成27年3月12日（木）、靖國会館九段の間において実施された。

理事会で承認を受けた平成26年度事業報告及び決算報告、並びに任期満了理事及び評議員の再任並びに新任理事の就任を含む役員の選任、並びに立入検査に基づく定款変更の決議案について審議され、全て原案どおり承認された。

また、昨年から会同を重ねている全体委員会の内容に関し、衣笠専務理事から説明が行われた。

①　年度報告事項

ア　平成26年度事業報告（別添資料）

イ　平成26年度正味財産増減計算書（別添資料）

②　決議後の役員等

ア　選任理事9名（定員6～10名）

理事長　杉山　蕃

副理事長　藤田　幸生

専務理事　衣笠　陽雄

業務理事　小倉　利之

同　水町　博勝

理事　臼田　智子

同　笹　幸枝

同　羽渕　徹也

新任理事　岩崎　茂（前統合幕僚長）

イ　監事2名（定員1～2名）

監事　伊集院雅英

同　阿部　軍喜

ウ　評議員14名（定員12～18名）

秋山　政隆　穴山　正司

飯田　正能　石井　光政

石井　千春　及川　昌彦

大穂　園井　太田　兼照

倉形　桃代　新垣　敬輝

根木　東洋　早川　雅彦

深山　明敏　長瀬　彰孝

③　定款変更内容の要旨

ア　顕彰会の事業の4条3項を変更し、「図書等の貸し出し」を追加

イ　31条を変更し、「会長1名、相談役及び顧問をそれぞれ若干名置くことができる」に変更

ウ　41条を新たに加えて「委員会」の設置条項を追加

三　第36回特攻隊合同慰霊祭の斎行について

当慰霊顕彰会主催による今年度の第36回特攻隊合同慰霊祭は、平成27年3月28日（土）、靖國神社において、厳粛盛大に斎行された。

靖國神社の桜は、3月23日（月）、境内の標準木により開花宣言が行われてから5日目、あたかも合同慰霊祭を待ちかねたかのように満開となって御英霊を迎えてくれた。また、天候にも恵まれ、近年にない慰霊祭日和であった。

このところ年々、会員の高齢化と天候の影響による参列者の減少が続き心配していましたが、今年は又とない好天と満開の桜に助けられ、当日受付けの参列者が多数あり、昨年を約50名も上回る250余名の方々にご参列を頂くことができ、心より感謝申し上げますとともに、来年もより多くの皆様方にご参列頂けるようお願い申し上げます。

なお、慰霊祭の詳細については、本会報『特攻』第105号に掲載されていますので、省略させて頂きます。

事務局からの報告等

寄附者御芳名（敬称略）

（平成27年1月1日～3月31日）

（単位千円）

一〇〇〇　多田野　弘
五〇　山根　秋男　四〇　松本　聖二
三〇　吉武登志夫　三〇　松本　憲二
二七　山根　猛　一五　降矢　達男
一一　中村　五郎　一〇　平野　三郎
一〇　荒木　精一　一〇　市川　雄一
一〇　大穂　利武　一〇　原島　淳子
一〇　むらさき会（陸士56期）
一〇　西　正昭　一〇　松本　司
一〇　大井　路雄　一〇　久保　巍
一〇　寺本　優子　一〇　河野　茂義
一〇　小山内昭三　八　椿　孝則
七　駒場剛太郎　七　中村光太郎
七　金子　亘秀　七　山口　武夫
七　高山　友二　七　百目鬼　清
七　中島　尚史　七　井川　嘉江
七　武谷　孝生　七　飯田　雍子
七　加嶋　昭男　七　渡部　利久
七　大澤　俊夫　七　下出　忍
七　丸井　容子　七　枡田　恭展
七　小松　雅也　七　服部　武志
七　十川重次郎　七　藤井　日正
七　塚田　征二　七　菅原　道之
七　早田　亮彦　六　小林　郁雄
六　斎藤　正夫　五　川岸　義視
五　田湯　聖禮　五　飯岡　哲子
五　遠藤　和子　五　益田　澄夫
五　樋口　太　五　戸部　清
五（公財）千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会
五　吉田　文尭　五　田辺さだ子
五　堀江　正夫　五　塩田　章
五　花塚真知子　五　湯澤　一枝
五　櫻井　光夫　五　樽井　弘和
五　山崎　悟　五　川井　孝輔
三　臼田　智子　三　水野　伸子
三　飯田　正能　三　茨木　治人
三　河本　憲恵　三　西村　久宣
三　井上　勝蔵　三　市場　敏司
二　萩原　健一　二　廣田　正
二　工藤　重民　二　川本　修二
二　高橋　房之　二　信平セイ子
二　今井　敏夫　二　佐藤　孝一
二　阿部　敏行　二　高野　剛
二　浅田　嘉美　二　小林　正昭
二　住谷　定　二　関根　賢治
二　澤田江里子　二　川田久四郎
二　後藤　昭一　二　奥村侑生市
二　峯尾　栄　二　河島　慶明
二　安味　貞嘉　二　奥山　雄三
二　宇井　忠一　二　臼井日出男
二　大賀　龍吉　二　土橋　猛
二　佐伯トシ子　二　井出野正和
二　岩井　良平　二　後藤　英夫
二　中村　実　二　志賀　昭夫
二　清水　典郎　二　森園　安男
二　刑部　五郎　二　小堀桂一郎
二　西村　米子　二　岩崎　昭男
二　原　照寿　二　井上　孝之
二　三春　仁　二　塚原　正
二　梅田　俊幸　二　小松　嶺生
二　中崎　博　二　杉原　清之
二　古屋　七郎　二　茂木　昌三
二　此元志津範　二　宇田川正子
二　小貫　達雄　二　岡崎　宏平
二　中村　家久　二　加藤　寛二
二　小林　次雄　二　広瀬　勉
二　川田　信雄　二　吉田　正則
二　加藤　千佳　二　中村　博志
二　高瀬　宏司　二　城ヶ端　専
二　武居　房子　二　北村　昭二
二　小山　照夫　二　田中　清
二　岡部　尚子　二　尾関　基
二　金子　幸生　二　水野　清
二　小林奈美子　二　杉江　公一
二　山本　健雄　二　後藤　文夫
二　辰巳　泰造　二　吉田　治正
二　鳥山　隆　二　新田　和子
二　布廣　鉄夫　二　丸原　巧
二　永島外太郎　二　田中　清
二　水内　三郎　二　道土井圭次
二　仁井　彰造　二　原田　義治
二　紙谷八十二　二　村越　正清
二　佐多　和仁　二　國武　統士
二　佐藤　義信　二　原口　静彦
二　里崎　雪　二　古閑カツ子
二　上嶋　正敏　二　牧　勝美
二　田代　義信　二　市来　徹夫
二　津覇　実雄　一　栗田　貞子
一　中島　幸雄　一　日高　誠
一　皆本　義博　一　埼玉偕行会
一　関　淳人　一　衣笠　陽雄
一　中村　貞三　一　小倉　利之
一　杉山　蕃　一　池田　守
一　青木　義博　一　関口　正孝
一　辻　外文　一　氏木　武
一　岡本　久吉　一　岡崎　幸平
一　梅田　光明　一　斎須　重一
一　橋本大二郎　一　萩野　茂雄
一　小松健太郎　一　山本　年男
一　藤野　洋政　一　新垣　敬輝
一　岩崎　淳治　一　中島　實
一　内山　正義　一　近藤　健
一　小林　清完　一　加藤　拓
一　北森　茂樹　一　上畑　幸晴
一　吉川　壱成　一　生峯　和代

御芳志誠に有り難うございました。

◇　◇　◇

新入会員名簿（敬称略）

（平成27年1月1日～3月31日）

宮城県　宮原　敏彦　斎藤　文彦
埼玉県　小笠原正男　関　淳人
田村　政昭　阿部　軍喜

千葉県　白井　忠俊
東京都　本多　克美
小林　昇
白倉　昂
田中　良平
山口　正人
諸喜田智也
田中　厚彦
山口　洋一
深野　真樹
神奈川県　渡邊　泰雄
天野　高枝
舘本　勲武
松本　賢二
中谷　悦治
吉川　壱成
柴　秀人
吉野　信二
湯川　正
遠藤　毅
上村　僚宏
栄山　旬子
西本　佳央
宮本　義巳
河村　薫
辻本　隆行
吉村　浩至
小西　伸尚
西尾　浩司
堀田　由美
岩崎　茂
藪田　保幸
簗瀬　武史
宿里　文子
森　雅紀
湯川　尚樹
佐々木章太
原田　敏裕
伊室　一義
森川　翔太
鈴木　雄一
伊藤　重夫
竹中　伸一
新井　勇輝
駒谷　厚子
湯川　智子
伊勢龍太郎
河合　伸泰
田中　誠二
松村　貴史
米田　雅人
北山　芳規
堀部　泰
奥田　善久
中井　健夫
廣田　豊子
大前　隆史
高知県　柳原　弘孝
熊本県　村上　和男

◆　◆　◆

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の意を捧げます。

宮城県　板橋　勝
福島県　脇屋　隆治（27・1・17）
栃木県　横塚　武
埼玉県　皆本　義博（27・4・5）
（元評議員・埼玉県郷友会名誉会長）
千葉県　戸部　清
岡本　俊章（26・12・2）
東京都　鈴木　利次
平林　克
高田　耕治
神田　延祐
長野県　宮本　了吾
愛知県　板津　忠正（27・4・6）
（知覧特攻平和会館初代館長）
福岡県　田中　弘俊
熊本県　佐藤　武（27・2・15）

会報『特攻』第104号正誤表

次のとおり誤りがありましたので訂正し、謹んでお詫び申し上げます。

（訂正箇所）
44頁1段　4行目
誤　岩手県　星　道弘
正　宮城県　星　道弘

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革
昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化
昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足
初代会長　竹田　恒徳　元宮様
二代会長　瀬島　龍三　氏
平成5年11月財団法人認可
三代会長　山本　卓眞　氏
平成23年1月公益財団法人認定
現理事長　杉山　蕃　氏

○当顕彰会の主な事業
・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
・広報誌等の発刊
・講演会等の開催その他

○年会費
・一般会員　3000円
・学生会員　1000円

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4596

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛としてください。

記

〒102－0073
東京都千代田区九段北3－1－1
靖國神社遊就館内　公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電　話03－5213－4594
FAX03－5213－4596